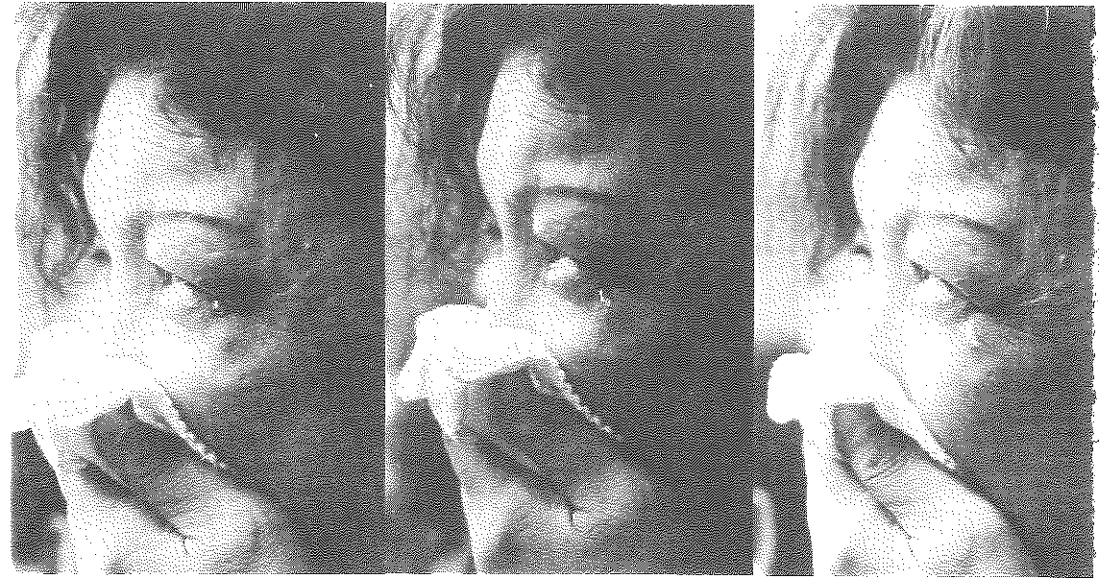


第 1 部

忘却を許さず

(一般養護課)



(早崎 隆氏撮影)



## 父と子供二人を奪われて

山崎 ハルエ (71才)

被爆地・寺町七六・実家の屋内(爆心地より一・〇km)

当時の急性症状・左側腹部の打撲。八月十三日より脱毛。

下痢が八月末より約一〇日間続く。歯筋よりの出血が、

八月十日より約一週間あった。その他発熱・耳鳴・咽喉の痛みもあった。又全身に斑点がでた。

家族の死亡・実父が被爆死(横川橋付近)長女・二男及び妹が被爆死(寺町七六番地実家)

現 症・狭心症・心筋硬塞・腰痛・脳動脈硬化症・高脂血症

### 生いたち

私は、広島市西引御堂町で父・山崎卯吉、母・リヨウとの間に、男四人、女五人中二女として生まれましました。父は、六十四才で八月六日被爆死しました。何処で死亡したのかいまだ遺骨も見つかりません。母は、四

十七才で心臓が悪く亡くなっています。

弟(長男)は五十二才胃ガンで亡くなり、二男は戦死、四女は三十才の時八月六日寺町の実家で、私の子供、長女・情子八才と二男・忠之六才と一緒に被爆死しました。

現今健在な姉妹・弟達は、姉が七十四才で五日市楽々園に住み、妹・二女が六十八才で大手町に、五女六十四才は大芝町に、四男五十四才は三篠北町に住み、それぞれの生活を営んでいます。姉が今病院に入院中で心配しています。それに私も心臓が悪いため、妹・弟達に心配をかけています。

さて私は、一二十五才の時縁あって、主人(岡山県生まれ野面義衛二十七才)と結婚し、当時は大手町八丁目之家を持ち、舅・姑、夫は六人の兄弟姉妹中の長男で、私を含め九人の大家族でした。広島には二年ばかりの結婚生活でしたが、主人の仕事の都合で京都に移り、又大阪へと移りました(主人は造兵廠勤務)。その間男子二人、女子一人出産しましたが長男(光之当時五才)は百日咳を患い、京都に於いて、五才で亡くなりました。

あの時代には予防ワクチンもなく、可哀想な事をしました。悪い事は重なるもので、主人が、昭和十七年十一月九日、腸の病気で、三十四才の若さで亡くなってしまいました。幼い子供二人抱えて大阪での生活は苦しく、昭和十七年十一月十五日広島に帰り、亡夫の家で辛抱しましたが、複雑な事情があり昭和十八年六月二十一日終に離婚。子供二人は私にまかせてくれず、泣き泣き一人で寺町の実家に帰りました。家業が諸車製造業で、雇用人も五・六人使い、弟二人・妹二人と私で、私は商売の事、家事一切の事も引き受けて働いていました。

### 被爆時の状況

当日（八月六日）弟（三男）は徴用で長崎三菱重工に行っていたが、前日（五日）に帰り、市内の勤労奉仕に出かけ、四男（市商中学生）は学徒動員で出ており、五女の妹は、これも徴用にかかり、当時已斐被服廠で働いていました。屋内にいたのは、私と八月四日漸く主人の家から引きとったばかりの、長女（八才）

二男（六才）と妹四女で、父は屋内で通いの大工さんと話していたと思います。警戒警報解除の直後の事で非常に残念でした。

八月五日夜の夜空襲で、土足のまま歩き廻ったので解除と共に、トイレの掃除にかかり、手洗鉢の前の廊下で雑布をしばっていました。ふと見ると二男が店先で折紙を手に椅子に座って外を見ていました。これが二男の最後の姿でした。

突然の閃光と悪臭に思わず顔を上げたときに、二階の下敷になっていました。バケツに右手を突込んだまま、右足は顔より高く、身体は二重に折れた姿勢で、声を限りに助けを求めたが、物音一つ聞えない。手洗鉢を支えていました。

コンクリートのすき間に落ちているらしい。真暗の中でやっと光を見つけ漸く這い出る事ができました。先隣から火が出て一面火の海である台所付近で妹の聲がする。助け出そうと右手の肘まで出したが、二階建が押しつぶさつてどうすることも出来ない。突然「お母さん、熱いよう／＼」と叫ぶ娘の聲がする。妹を

助けて二人で子供達を助けようと思ったが、火は益々燃えひろがるばかりで、手のつけ様もない。妹が「姉さん一人しか生きていないだろうから逃げのびて——供養を」と一生懸命声をふりしぼって泣きさけぶ。私は力つきて火に追われ、断腸の思いで通りまで這い出ました。

すさまじい音を立てて燃える寺。寺の間を抜け横川橋まで行くも、父の姿は見つからなかった。黒い雨に降られ寒さに震えました。寺町の集合地が、安佐郡古市ときめられていたので、途中祇園町西原の知人今村さんを頼り一晩泊めて頂いた。

終戦前の食物は、父が諸軍製造業をしていた関係で百姓さんとの交流が多く申し訳ない事ですが、米・野菜類等不自由はしませんでした。

### 被爆後の生活

八月六日は先程も申しました様に西原の今村さんの家に一晩泊めて頂きました。翌朝（七日）、又寺町の実家に帰って見るも、見渡す限りの焼野原で家にも寄り

つかれず、遺骨も拾えず、ただ涙ばかり。何時迄も立去りがたかったが合掌して、元来た道を引き返ししました。

二滝から電車に乗り古市に行き、方々父を探しましたが、消息は解らなかつた。そのうち私自身の体の限界を感じましたので、罹災証明を貰い、古市から細坂迄バスで、一休みしてポツポツ峠を越えて私達最後の集合地久地村へたどり着きました。が、父の姿はやはりありませんでした。

足を洗って貰い座敷に上ったきり起き上れない状態でした。連日高熱が続き、食欲が全然なく、歯筋より出血・耳鳴りがして全然聞えませんが、咽喉の痛み、身体の斑点、頭髮は全部抜けて、最後に下痢に苦しみました。戸山に医師がおられると聞き妹が交渉してくれまして、往診を一回だけ受けました。注射も投薬もありませんでした。人伝えにドクダミソウが良いと聞き、摘んで貰いこれを煎じてお茶代り、食餌代りにしました。

## ホーム入所前後

身体の快復と共に、ぼつぼつ農業の手伝いをして野菜を作りました。被災して集った近親者も生活を求めて、大阪・広島市内へと一人去り、二人去りして、私一人が残ってしまいました。近所の田植・稲刈等、馴れぬ仕事を手伝って四年間を経過しましたが、収入は全くなく、生活が苦しいので、横川町にある丸善衣類交換会で働いていました。昭和二十二年、五日市町の姉の近所の二世の人の赤ちゃんの世話を頼まれ、お手伝いとして三十八年まで働き、その後は紙屋町の風呂屋さんのお手伝いをしましたが、体調が悪くなり、病院への入退院を繰返しました。

姉妹・弟は健在していますが、それぞれの生活があります。まして、親身になって世話をしてくれる身内もいないので、ホームに入所しました。入所者の方々は孤老ばかりで、淋しさも苦しさもお互いに手を取り合っていて、静かに日々を過せるホームだと考えていましたが、案外子供さんの沢山おられる方々を見るにつけ、非常に

ショックでした。人間関係のむつかしさ、あらぬ中傷に心で泣いた日もありました。所長様をはじめ、職員ご一同様の温いご心身にしてみても嬉しく思っています。設備も申し分なく、心から感謝の日々を送らせて頂いています。むつかしい病気を抱えて皆様と同じ行動の取れぬ身体、何卒お許し下さい。

## 広島のカが火と煙の海に

岡橋 チヨコ (71才)

被爆地…加古町・親戚の屋内(爆心地より一・〇km)

当時の急性症状…背部・頸部・両下肢大腿部・両上肢からの出血があり手指が紫色になった。嘔吐が八月八日から約一カ月続き、下痢が八月二十日から一年間あり、脱毛が九月二十八日から一二月迄あり、丸坊主同様となる。発熱は九月上旬から一カ月続いた。

家族の死亡…従兄弟の子供被爆死(加古町)

## 生いたち

私は、広島市吉島町四五番地で、父・岡橋和八、母・クヨとの間に、二男三女中、二女として生れました。学校は中島小学校へ行き、高等科は国泰寺学校を卒業しました。

父は、体が弱く定職にはついていませんでした。五十四才で心臓喘息が原因で亡くなり、母も心臓が悪く、五十二才の時、心臓マヒで亡くなりました。

姉（長女）は、昭和十年三十二才に熱暑病で亡くなり、その娘（姪）のみ健在です。

弟（長男・学生）は昭和五年十九才で、これも両親と同様心不全で亡くなり、二男（弟・学生）は昭和十年腸チフスに患り、十九才で死亡。妹は胃潰瘍で、昭和六年十七才で亡くなりました。

私は、二十一才頃から習いおぼえた男物洋服の縫替えと和裁の内職等をしていました。

昭和十七年十月、二十五才の時縁あって、武田正記（三十一才）と結婚し、一度妊娠しましたが四カ月で早

産し、その後は妊娠はしていません。結婚後二年を過すも体が弱く、夫に付いていけない（迷惑をかける）事がわかり自ら身を引きました。世帯は天神町で持つていましたが、離婚後は吉島町四五番地の実家に帰りました。

## 地上まで降りた雲

八月六日の朝は、父の一七回忌で墓参りに親戚の子供（従兄弟の子供で十才、男の子で将来養子にと思っていた）を連れ、加古町住吉橋西側土手、十m程南に下った左側の親戚（上野浅二）の玄関口の門に入ったとたん目の前が真暗になり倒れた。どの位倒れていたのか解らぬが、気が付けば家の壁と柱の下敷になっていた。無中で壁竹を手折って這い出た時は、血ダルマとなっていました。（背部・頸部・両下肢大腿部・両上肢から出血）。あたりを見れば雲が地上までおりて、私は雲の中に圧迫されている様で、身体をどうする事も出来ず、ただ一人お念仏を唱えて時間を待つていましたら、雲はいつとなく逃げて薄くなりました。その時泥雨が強くザ



法 話 風 景 (昭和56年5月)

ーッと降りました。子供はどうなったかと気になりあたりを探しましたが、遺体も見つからず、被爆死したものと思います。

あたりは火と煙の海で、やっと住吉橋の橋の下に降りて、咽が乾き川の水でもと思って手をつけると、熱くてどうにもなりません。又土手に這上ると黒こげ人間の姿ばかりで、「えー・えー」とうめき声が聞えてくる。私はどうする事も出来ずあたりには人影もなく、素足で火の中を走りつづけました。ふと観音橋に気付き橋までたどり着けば、大師像が見つかりホッとしました。自分の体を見れば着ていた物はなく、まるで裸同然で、あちこちから出血していました。大師像の下を流れている下水のところに着いたと思ったら、B29が焼夷弾を二発落して南に向って逃げました。一発が下水の中に落ち、爆発して下水の両側に生えていた「ヨモギ」も大分焼かれました。「ヨモギ」は止血に効果があると聞いていたので「ヨモギ」を探し歩き、その汁を呑んだり（お茶替り）、汁りカスは傷口にはり、出血を止めました。「ヨモギ」は約一カ月余り

探し歩き吞み続けました。

八月六日は観音橋の土手で寝ました。翌日から観音町の市商の倉庫で九月迄、知らぬ人ばかり被災者十二人が生活しました。毎日死体が校庭に運ばれ焼かれていました。その後（昭和二十年十月）南観音グラウンドに小屋を建て、約三年間の生活をしました。

食物は色々と救援物資を受けましたが、嘔吐が八月八日頃から約一カ月続き何を食べても嘔吐し、「ヨモギ」を煎じこれを飲んでいました。今から考えてみますと「ヨモギ」で命拾いした様に思います。その他、ドクタミ草・ミコン草も煎じて、薬がわりに飲みました。医療は一度、江波町小沢医師に受診しましたが、医師は首をかたむけられたばかりで、何もしては頂けませんでした。（八月中旬）。

### 行商・内職・家政婦

昭和二十年十月から、南観音町グラウンドの小屋で生活でした。被爆後十二日間は着る物もなく、裸同然であった事は先程記載しておりますが、幸いにも重要

書類と阿弥陀像は風呂敷に包み、肌身に付けていたもので助かりました。八月十七日、己斐橋のふもとで竹田呉服屋さんが焼残り、衣類を売っていると聞き買い求めに行きました。その時の嬉しかった事は今でも忘れません。

何時迄も遊んでもおられず、行商を約六年間（昭和二十二年―二十九年）続けました。島根県から魚を仕入れて売ったりして、一時しのぎをしておりましたが、体調が悪くなり又ミシンの内職に戻りました。

内職は余りお金にならず、そこで昭和二十八年から昭和四十八年迄、宇品町にある安井家政婦会に入会し働いていましたが、両下肢の坐骨神経痛がおこり、十分には働く事ができませんでした。ただ一人の姪（カツエ姉の娘で結婚して今は能美島に居住）は被爆当時、吉島町に居たとの事でしたが、交流がなかったので私は知りませんでした。

### 楽しいな法話

所持金も少くなり、坐骨神経痛も出て体調も悪くな

るばかりで、これ以上一人で頑張ることも出来ず、市役所原対援護課に相談に行きましたら、係の職員が当ホームの事を話して下さり、昭和五十二年七月一日入所する事が出来ました。入所後いつとなく身体の調子も良くなり、自分の事だけでは出来る様になりました。今では、クラブ活動として生花・茶道・舞踊クラブに入り、お稽古ごとに生甲斐を感じています。又別院からの月三回の法話にあづかる時が一番に楽しい時です。

私の様に孤老に近い者にとつては、ただ、如来様のご慈悲と念仏尊の大きな「力」、廣大無遍の喜び。所長様をはじめ各課長様・職員の皆様のお陰で今日があり、生き甲斐を強く感じ毎日感謝の気持ちで暮している次第です。ありがとうございます。

## 原爆で家族全部を失つて

森 田 陸 夫 (72才)

被爆地・加古町・県庁内(爆心地より一・二km)

当時の急性症状・ガラスの破片で両腕負傷、八月十五日頃から下痢が始まり十二月まで続いた。

家族の死亡・妻と子供・被爆死(市内材木町) 妹夫婦・被爆死(市内南観音町)

現 症・冠不全・陳旧性肺結核・慢性気管支炎

### 生いたち

私は、広島市内堺町一丁目二三番地で、父・森田菊藏、母・リウとの間に六男二女のうち四男として出生しました。父は六十一才の時脳卒中で死亡し、母は六十才で肝臓の病気で死亡しました。兄弟姉妹のうち兄(長男)は七十二才で亡くなり、二男はブラジルで亡くなり、三男、六男も死亡し、男兄弟で健在なのは五男・久保

田忠明（久保田家に養子に行く）のみで病弱である。妹は長女夫婦が南観音町で原爆死し、二女も六十一才で死亡しています。

私は中島小学校卒業後、県立工業学校の電気科を卒業し、昭和元年八月より昭和二十年八月迄県庁で庶務係に就職し、電気関係の業務に従事していました。三十五才の時、古奄静香と結婚し、二子（女の子）を貰ける。（静香と結婚前、二人の女性と同棲するも、籍を入れぬうちに二人共死亡している）

### 確認できぬ子どもの死

西観音町に自宅があり、当日は朝八時前に家を出て、加古町にあった県庁内で被爆しました。私のいた部屋は半壊しました。私は両腕にガラスの破片が入り少々負傷したが、兄が県庁衛生課に勤務していた関係で、塗布薬を貰い受け、自分で手当をしました。当時の食物はひどい物でしたが、幸いにして色々の関係で手に入り、不自由はしませんでした。

当日妻は（二十七才）国民義勇隊として、二才になる



原爆死没者名簿公開風景（広島平和文化センター提供）

女の子供を背負い、材木町へ建物疎開に従事していましたが被爆死。遺体も見つからず、何一つ残ってはいませんが、昭和三十七年七月三十日に平利記念館内で死者名簿から見つけ、被爆死した事が確認されました。けれど子供の名前は見つかりませんでした。八月一日、遺骨を慰霊碑の前で受取りました。

兄と弟は戦地に出征していたので助かりましたが、南観音に住んでいた妹夫婦は被爆死しました。母親のリウは草津町で被爆、昭和三十七年八月三日肝臓病で死亡しました。

### 原爆の恐しさを痛感

西観音町の家は全焼したので、妹夫婦（被爆死）の家（南観音町）に住み、母親・甥・姪等の大家族の面倒を見ていました。被爆後体調が悪く、県庁を退職しました。八月十五日頃から下痢が起り、約十二月末迄続いた。当時どこの薬品か記憶がありませんが、粉末剤を飲みました。

暫くは退職金で生活していましたが、何時迄も遊ん

でおられず、南観音町にあった広島印刷の事務に入り六、七年勤め、その後は年金で生活をしました。家も三滝町に移り、母と妹と甥と四人の生活でしたが、母親も長崎厚生堂病院へ入院三年後亡くなり、兄弟妹姉も続々と死亡し（甥・姪は健在）、生き残ったのは前述したように、久保家に養子に行った五男のみです。弟は肺結核で長く吉島病院で療養生活を続けていましたが、最近退院し通院している状態です。妻は、戦前にも四回、戦後三回貰いましたが籍を入れぬうち、次々と死んでしまいました。

弟は身体は悪いが子供には恵まれ、東京・大阪で息子達が働いています。時々親子の対話もある様子を聞き、原爆死した妻や子供の事が思い出され、原爆の恐しさを思い、戦争を二度と繰返してはならないと思います。

昭和三十七年八月十三日知人より折伏せきふくを受けて創価学会に入会。度々富士山にも登り、指導員になりました。

入所一年―社会の役に立ちたい

昭和三十八年に舟入幸町一〇一六(大下アパート)に住み、昭和五十四年七月脳軟化症(当時五五才)で倒れ記念病院に入院。九月十日迄入院していたが、その後は田方の力田病院へ転院し、十一月九日、力田病院を退院する。

その後は舟入町香川内科へ通院治療をしていましたが、体調は余り良好でなく、将来の生活に不安を感じていましたところ、民生委員が色々お世話下さいまして、当ホームの話聞きホーム入所に決めました。

昭和五十五年三月十三日に入所し約一年近くなりましたが、日々を楽ししく思い、出来る事なら健康に気をつけ長生きをし、世の為、人の為にも何かお役にたちたいと思います。入所する迄は、苦しい社会との闘いででした。クラブは書道と音楽教室に入り、趣味に生き甲斐を感じている次第です。

「おばさん助けて」

の声を残し

濱田 シズコ (74才)

被爆地・加古町・姉の家の屋内(爆心地より一・二km) 当時の急性症状・負傷なし、下痢が八月九日から十日間あった。

家族の死亡・姪が被爆死(一緒に居た)

伯父が被爆死(市内観音町)

現 症・腸結核術後・貧血症

生いたち

私は、山県郡豊平町で、父・田坂藤太郎、母・サイとの間に男子一名、女子六名中三女として生まれました。小学校は豊平町阿坂尋常小学校を卒業したのです。父は、六十二才の時脳溢血でしくなり、母は、八十七才の高令で老衰で亡くなりました。姉は、生まれてまも

なく亡くなったと聞いております。妹（四女）は、昭和五十年に六十八才（心臓病）で亡くなり、五女は、十九才で（肋膜炎）亡くなりました。弟も、五十五才でこれも心臓病で急死しています。今健在している姉妹は、当ホームにお世話になっています姉（二女・田坂アサヲ）と豊平町に居住しています妹（六女）と私で三人のみです。

私は、昔の事で十四才の時、親がすすめるので何も解らぬまま、山県郡千代田町、峠春三（当時二十才）の家（親戚関係）に嫁入しました。六年間に二人の男子を出産しましたが、複雑な事情があり、結婚生活に限界を感じ、子供二人は峠家に残し（舅・姑も元気で若かったので）、離婚に踏切り実家に帰りました。子供の事ですが、その後長男は死亡（二十一才）、二男は健在です。

生活の為に遊んでもおられず、伯父（杉岡周吉）が鷹匠町で貸衣裳屋をしていました関係で、私は加古町の貸衣裳屋に連絡係りとして働いていました。

### 生地獄そのもの

加古町の借家で、姉（田坂アサヲ）と姪（美保子・姉の娘）と三人で住んでいました。

八月六日の朝姉は、勤務先・中国塗料会社（吉島町）に勤めに出かけ、私と姪が屋内で被爆したのです。ピカーツと光つて、後はおぼえていません。どの位時間がたったのか、気がついた時は、二階建が全壊し、私はその下敷になっていましたが、幸いにも負傷なく、その場から逃げ出すことが出来ました。

あてもなく、命からがら住吉川に逃れて行き夜まで「イカダ」の上で過し、その晩は明治橋の上で一夜を明しました。今でも思い出すのは一緒にいた姪のことで、家屋の下敷きとなり、「おばさん助けてー、おばさん助けてー」と叫ぶ声が聞えるも、探しようも、助けようもなく逃げた事です。本当に可哀なことをしました。八月七日無事であった姉と二人で焼跡に行き、姪の遺体を見つけトタン板に乗せて明治橋の土手まで運び、大勢の死者と一緒に、警察官、兵隊さんに焼い

て頂きお骨にしました。その状況は生地獄そのもので、今でも、いや一生忘れることは出来ません。その後姉と一緒に、廿日市町平良小学校へ避難し、八月十五日（終戦日）まで小学校にいました。

当時の食事は、小麦のご飯・味噌汁・うどん等をよく食べたものです。体調は、八月九日頃から下痢があり、十日間も続き弱りましたが、薬もなく、医療機関もなく、治療は何もしませんが、おかげがあつたのか自然に止りました。

### 特別認定患者となる

八月十五日の敗戦を聞き、姉と共に実家（山県郡豊平町）に帰り、十月迄厄介になつていましたが、海軍に現役で入隊していた息子（二男・輝人）が、二十年八月末無事に除隊となり帰つて来たので、十月、翠町に間借りをし、暫して嫁を貰い三人の生活を始めた。

二十一年二月に第五基町の市営住宅が抽選で当り、基町へ転宅しましたが、孫が次々と三人生まれ、狭い市

営住宅に私の休息する部屋もなく、体は弱く悩んでいました。その頃、再婚の話しが持ち上り、三十五年、祇園町長束に居住していた濱田友市（当時七十五才）と再婚しました。夫が四十一年（八十一才・脳出血）亡くなる迄約六年間は長束に居住し、死亡後は、坂町の知人なたよつて、知人宅の留守番をして生活をしていたのです。

被爆後体調が悪く、二十七年五月には、胆のう手術。更に、三十年には大腸の手術をいづれも市民病院にて入院し治療を受けました。その後舟入病院の人間ドックに入った時、貧血症と診断され、三十四年十月十九日、特別認定患者と承認されました。

### ホーム入所前後

夫が亡くなった後、体が弱くて（二回も大手術を受け、貧血症も有り）息子夫婦と再度同居したいと思い、息子に相談したところ、私があの子を置いて実家に帰った事を、今でも心良く思っていないようで（前述しましたように、人様には言えない事情がありました）、私は仕方なく



手芸クラブ (昭和56年5月)

山県郡千代田町の親戚に身を寄せましたが、なかなかおもしろくありませんでした。

その時、千代田町役場の職員さんが当ホームの話をして下さったので、幸いと喜び、自主的に入所に踏み切りました。五十年六月一日、当ホームへ入所する事が出来ました。

設備も良く、職員の方皆さんも親切で、何も言うことはありません。ただ人間関係がややこしく、気持の休まる事がなかなかありません。残念に思います。

クラブ教室も活発で、多くの入所者が参加しております。私も手芸クラブに入り、少しでも老人呆けの予防にと張切っています。

## 爆風で吹飛ばされて

近 信 与 一 (75才)

被爆地：西白島町・白島小学校付近の屋外（爆心地より

当時の急性症状…左頭部に負傷・胸部打撲  
家族の死…妻（白島町にて）、義弟（妹の主人…部隊にて）  
現 症…陳旧性肺結核

### 生いたち

私は御調郡久井町字泉に、父・近信保吉、母・コウの間に、明治三十八年六月六日、十人兄弟の内、四番目次男として生まれました。兄弟は小さい頃に亡くなり、私と、妹二人が現在生存して居ります。

父母は、百姓をして生活して居りました。私は羽和泉小学校を卒業後、三年位、農業の手伝いをして居りましたが、広島市に出て、店員として就職しました。二十才の頃、父が中風を患い、病の床に臥したので、田舎に帰り、農業に専念しました。

昭和七年（二五才頃）自動車運転免許を取り、広島市で、タクシー、トラック、バスなどの運転手として働いて居りましたが、昭和十九年に強制徴用され、東消防署配属消防手教習所に入所しました。訓練終了後、東

消防署消防運転手に任命されました。その後、矢賀出張所勤務となり、消防活動に従事して居りました。昭和十九年に知人の紹介で、石丸ハルメと結婚しましたが、子供は有りませんでした。

### 遺骨の妻

昭和二十年八月六日は非番で、西白島の自宅に居りました。警戒警報が発令され、急遽、勤務につくため矢賀にむかう途中、広島駅の近くで解除になったので、帰宅しようと思い、白島小学校の前まで引き返したとき、原爆が投下。乗って居た自転車諸共、小学校のブロック塀にブツ飛ばされて、胸を打ち、左頭部（耳の上）に硝子が刺さりました。多量の出血が止まらないので、路上にあった布を拾って止血し、家迄たどりつきました。家は無惨に倒壊し、妻の姿が見当りませんでした。その夜防空壕に眠り、翌日から、妻を探すため方々尋ね歩きましたが、徒労に終わりました。そのうち、私も傷と疲れで体調が悪くなり、水源池の近くの工兵隊作業場で、疵に油を塗って貰いました。次第に

体が衰弱して来ましたので、三日後田舎に帰り、ここでやっと医者にかかる事が出来ました。

郷里に帰ってから、妻の消息が気に掛つてなりません。けれど自分自身が病臥の体で、思う様探しに行く事も出来ず、唯、神仏に無事を祈るばかりでありました。九月末頃やっと、起きる事が出来るようになり、広島に出て来ました。元の住居付近を尋ね、旧知の長谷川さんのところに行き、そこで初めて妻の消息を聞き、遺骨に對面する事が出来ました。

八月六日朝、私が出勤した後、長谷川の奥さんと妻は、いつもの通り、近所の製薬会社に働きに行きました。原爆が投下された時、長谷川さんは何とか逃げ出されたそうですが、妻のハルメは、機械の下敷となつて焼死したそうです。奥さんがその後遺骨を拾つて、大切に保存して下さつたそうです。四十幾日ぶりかた我が手に返つた妻の遺骨を抱いて、一人涙を流しました。

妹のツネ（三女）は、加茂郡河内町・関本家に嫁して居りましたが、主人が、八月六日の朝に応召し、二

部隊に入隊訓辞を受けた直後に被爆し、即死だったそうです。

末の妹・ハルヨは、牛田町東区が多田家に嫁して居りました。主人は応召中でしたが、主人の妹二人が広島市内に居り被爆したらしく、行方不明で、現在に至るも、遺骨が見つかりません。

### 被爆後の生活

被爆負傷のため、仕事も出来ず、昭和二十一年に、消防署を退職し、郷里に帰りました。その時は、すでに両親や兄達も死亡して居りましたので、一人でぶらぶら暮していましたが収入も無く、その日の糧にも困る位でした。

昭和二十二年、思い切つて、御調郡の家や土地を手離し、賀茂郡大和町に移住し、小作に励み、二十三年頃はじめて人並の生活が出来るようになりました。それから、割合に平穩な生活を送っていましたが、昭和四十五年六月、脳血栓で倒れ、半身不随となり、三菱三原病院に三方月入院しました。退院してからは、



有福温泉慰安旅行（昭和47年10月）

俵山温泉や、有福温泉等で治療しました。四十六年四月に、喘息で、原爆病院に入院しました。二人の妹達は、それぞれ、苦しい時代を生き抜いて、立派に生活をしていました。兄の私が迷惑を掛ける訳にも行きませんので、原爆病院の勧めを受けて、昭和四十六年十二月二十日原爆養護ホームへ入所しました。

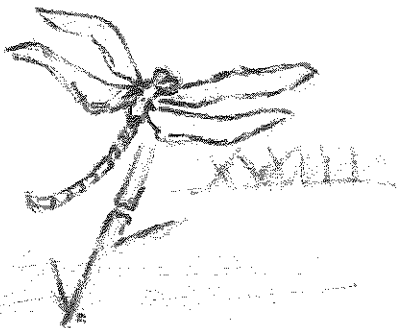
#### 私達の体験を生かして

原爆養護ホームに入って、平穏な日々を送って居りましたが、五十一年六月に、開放性肺結核と診断され、吉島病院に入院。二カ月後、西条の国立病院に転院。長期入院のため、ホームを一旦退所しました。治療の甲斐が有り、五十三年十二月に再び、原爆養護ホームに入所させて貰いました。現在の心境は、又病気が再発したら、ホームを退所しなければならぬがと、そればかり心配して居ります。

思い返せば、原爆が投下されて三十五年間、いろいろ苦しい事がありました。今でも、妻のハルメが家屋の下敷になり、逃げ出す事が出来ないで生きながら

焼死したのではないかと思ひ、不憫でなりません。

どうか、私達の辛い体験を生かして、二度と戦争の起らない、本当の平和な世界が訪れるようにと願っております。



## 被爆で夫婦が生き埋め

川 西 平三郎 (85才)

被爆地・観音町・居宅の屋内(爆心地より一・三km)

当時の急性症状・左眼に木舞竹がささり負傷。

家族の死亡・死亡者なし

現 症・脳動脈硬化・慢性胃炎・神経痛・腎障害

### 生いたち

私は、香川県高松市片原町で、父・川西喜代次、母・ヒサとの間に、長男として生まれました。姉が一人居りましたが、私と大分年令が違ったように記憶して居ります。父母は百姓をして居りました。私は体が弱く、五才の時と七才の時に、二度も大病を患いました。後に母からは、脳膜炎だったと聞かされて居ります。それが原因で、とうとう小学校にも行きませんでした。私が四才の時に父が死にましたので、姉の嫁ぎ先に

食べる事に精一ぱいでした。

### 地獄の絵図

昭和二十年八月六日は、朝からよく晴れた日でした。八時十五分頃に、物凄い閃光と爆音と共に家屋が倒壊し、妻の寅枝と二人が生き埋めとなりました。私は左眼に、家のこまい竹が突きささり非常に痛みましたが、無我夢中、命からがら外に這い出る事が出来ました。

丁度、散髪に来て居られた妊婦の方と、その子供さんを助け出し、近所の家も殆んど倒れていましたので、下敷になって居た人を、十人以上も助け出しました。顔見知りのお爺さんが、倒れた柱につかまって「助けてくれ」と、叫んで居られたので、抱えて逃げようとしたとき、釘が足の裏から甲の方まで突き抜きました。

（それが原因で、長い間患いましたが、薬など無い時代でしたから、手持ちの赤チンで治療しました。）

痛む目や足を庇いながら妻の手を引き、福島川の河原に避難をしようと、逃げる道中のことでした。熱線で焼けただれて、肩から皮膚がぶらさがって居る人。

厄介になり、十三才まで育てて貰いました。その姉がまた死亡しましたので、母のところへ帰ろうと思いましたが、けれど、母が再婚している事を知り、家出同様にして、大阪に行き、警察で事情を話し、署長の紹介で理髪店に行き、二十才まで住込み奉公をしました。以後転々と就職先を変え、二十七才の時縁があつて、穂迫寅枝（二十才）と結婚し、やっと腰を据えて自分で理髪店を開業しました。お陰で商売は繁盛するし、長男・平一、次男・平信と、二人の子供にも恵れました。しかし、妻のいとこが隣に店を構えて張り合ひ、感情的に面白くなくなつたので、思い切つて長男が三才の時に広島に移転し、色々な理髪店に職人として務めました。

三十五才の時、観音町西一丁目で理髪店を開業し、以後十五年間無事に過しました。太平洋戦争が日増に激しくなり、昭和二十年には長男が軍人となり、沖繩本島に行き、次男は、満洲建国大学に入学して、夫婦二人で理髪店は開いて居りました。物資不足の時代で、今日は雑炊、明日はお米の工面と、鉄道草や糠団子等、

顔が黒こげになった子供さんが、「母ちゃん僕じゃア」と泣いて取りすがつても、その母親には我が子の顔と信じられないようです。まこと地獄の絵図を目の当りに見る思いでした。

天満町電停近くに、電車が二台止つて居て、中に六人位い死体となつておられました。また、防空壕の中で全身火傷され、「水をくれ、水をくれ」と叫んでいる人がありましたが、火傷の人に水を吞ませると死ぬと聞いていましたので、飲ませませんでした。翌朝行つて見ると、もう息絶えておられましたので、「ああ、あの時一口でも水をあげておけば良かった」と後々まで後悔し、こころ残りでなりませんでした。

六日のお昼頃には自宅付近はまる焼となり、何一つとして取り出す事も出来ず、その晩から天満町の電車道近くの陸軍の防空壕に、寝起きするようになりました。八日頃から、兵隊さんと一緒に近所に穴を掘り、道路に転んでいた死骸を三十体以上埋めました。その臭い事といつたらお話しにならない程で、死臭鼻を突くとは此の事だと思ひました。川には、人の死骸、

牛や馬の死骸もそれこそ沢山流れて居りました。被爆の時に黒い雨が降り、それがかかったために、皮膚病や、虱をわかして、見るに耐えられない人も沢山居られました。

### 左眼失明

被爆後、防空壕の中で一年位暮しました。大変な食糧難で、玄米が少しばかり配給されましたが、瓶の中に入れて細い棒で突くのですがなかなか搗げずに困りました。食物が無いのが何よりもつらく、木の根や草の根も食べました。その頃、田舎から救援物資としておにぎりの配給が有りましたが全部腐つており、福島川に捨てました。その時の情けない気持は今でも忘れる事が出来ません。水道の水が長い間出なかつたので、ポンプの水を使って居りました。それが悪かつたのか、妻の寅枝が赤痢にかかり大変弱つてしまいました。それを見かねた同じ壕に住んで居た人（五人位）が宇品の方まで歩いて行つて、薬を買つて来て下さり、人の情をしみじみ有難いと感謝しました。

その後、家内は腰の痛みがひどくなり、方々通院しましたが、今日に至るも回復しておりません。私も目を痛めて、随分眼科に通院しましたが、左眼はどうとう失明してしまいました。

昭和二十一年九月に、もと開業して居た西観音町にバラックを建て、やっと天満町の防空壕生活を引き払い、何とか理髪店を再建する事が出来ました。

その前年十二月に、長男平一が足に負傷しながらも何とか命を取り止めて、沖繩から復員し、満洲にいた次男の平信も二十一年の暮れに、引揚げて来て、苦しむ中にも家内一同、全員が無事でいた事を喜び合いました。その後、何かとつらいながらも家業に励んだおかげで、息子達もそれぞれ立派に家庭を持ち、私達から独立して行きました。

昭和四十二年、妻と二人で相談し、永年住みなれた家と土地を(約四十年間住んでいた)売却し、舟入南五丁目借家住いをしておりましたが、寄る年波と行先不安を感じて、息子達にも相談しましたが、それぞれ家庭の事情が有り、同居生活もむつかしく、夫婦二人原

爆養護ホームに入所させて下さる様に市役所に御願ひに行きました。

### 妻と共にホームに入所

昭和四十九年一月十六日、養護ホームに入所させて戴いてからは、夫婦二人の部屋に入れて貰い、何不由ありません。病気に掛つても舟入病院が近い為安心で、何から何まで至れり尽せりで大変有難いと思ひ、毎日が感謝の気持で一杯です。之から先、二度とない人生を、妻と共に一日でも長く生きさせて戴きたいと思つて居ります。最後に、職員の皆様有難うございます。今後よろしく御願ひ申し上げます。

## 被爆による妻との別れ

桜田重作 (70才)

被爆地…東白鳥町・兄の家の屋内(爆心地より一・五km)

当時の急性症状・負傷なし、後遺症もなかった。

家族の死亡・兄嫁が被爆死（祇園町）

現 症・高血圧症・脳動脈硬化症

## 生いたち

私は、旧安佐郡戸山村阿戸で、父・森多市、母・桜田スギとの間に二男として出生しました。兄は桜田四樹よきと言って、自分の父親とは違います。兄弟共に母の姓を継いでいます。その理由については聞かされておられませんし、父の顔も殆んど記憶していない状態です。

昭和七年十月、島根県で死亡したと聞かされていましたが、何の病気で、何才であったのか解りませんでしたし、母は胃病で五十三才の時亡くなり、兄は昭和二十四年四十八才で心不全の為死亡。兄嫁は寺町で被爆し全身に火傷を受け、本人の実家（祇園町）で三日後（八月八日）被爆死しています。

姪（亡兄の娘西尾定子）は結婚し、現在祇園町南下安に居住しています。自分の身寄りと言えば姪夫婦と、もう一人定子の妹（桜田米子）で、現在定子の家に厄

介になり工場に勤めている。

私は戸山尋常高等小学校の尋常科を卒業し、十五才のとき、三篠町一丁目の久保田自転車屋に住込み、自転車の塗替えに約十年勤めました。昭和十一年十二月（二十五才）脊髓カリエスを発病、岡山大学病院へ約六カ月入院治療をしました。昭和二十年七月（当時三十四才）島根県生まれの彼女（ヤスエ）と同棲しておりましたが、被爆を受け、一カ月余りで彼女は島根県に帰り結婚までには至りませんでした。

## 被爆・敗戦の虚脱

八月六日は、東白島町の兄の家にヤスエと同棲して、屋内で被爆。幸い怪我はなかったので、ヤスエと一緒に裏の猿猴川の上流に逃げ、河原で夜をあかしました。八月七日、むすびを一個つつ貰いそれを食べながら、祇園西原の知人の家のがれ、二、三日厄介になった。ヤスエはその後島根の実家に帰る。私は八月十五日の敗戦を聞いてやりきれない気持で島根のヤスエを尋ねて行き、一晚泊って又広島へ帰ってき



音 楽 ク ラ ブ

ました。ヤスエとはこれが最後でした。私は幸いにも被爆の後遺症も出ず、脊柱を少々打撲した程度でした。当時の食物と言えば麦飯と漬物位でした。

#### 被爆後の生活

島根県から帰った後は、牛田本町（兄の知人）の家はかなり厄介になりました。が何時までもお世話になっているのも心苦しく、その後、三篠町三丁目の飯田製材所へ住込んで十三、四年頑張り、主人からも目をかけて貰いました。昭和三十四年に知人から折伏を受けて創価学会へ入会しました。

昭和四十年四月頃より体調が悪くなり、カリエス、高血圧症、脳動脈硬化症で三篠町の小田病院へ入院し約六年間の療養生活となりました。退院後は、大芝町の片山木工所で十年間（昭和五十年まで）働き、後は失業保険を一年間受給し、ホーム入所までは年金で生活をする。

ホーム入所前は、大芝町一丁目二十三一六、紫雲荘アパートに住んでいましたが、私が独り者であること

から、家主より立退きを言われ身寄りも少なく困って  
いましたところへ、創価学会の同志から当ホームの話  
しを聞き、自主的に入所手続きをしました。

昭和五十三年七月一日に入所が出来、感謝の日々を  
過しています。音楽クラブに入り、生きがいとしてい  
る。

## 妻が爆死をのがれた

杉本敏行（83才）

被爆地：東白島町・自宅より1kmの薬屋の店内（爆心地  
より一・五km）

当時の急性症状・特になし

家族の死亡：妻の姪二人、甥一人、姪の子二人、計五人が

被爆死（市内白島九軒町）

現 症：貧血症・腎硬化症・心障害

## 生いたち

私は、広島市大須賀町の鶴羽神社の近くで生をうけ  
ました。父・杉本勝蔵、母・勝子の三男として出生し、  
兄二人、姉二人の五人兄弟でした。父は、当時農学校  
の先生をしておりました。市内に二、三カ所の土地も  
有って、家は割に豊かでした。私は荒神小学校に入學  
しましたが、六年生のとき東京市江戸川牛込小学校へ  
転校しました。これは、母の兄に当る伯父が、東京で  
貿易商をしていたので、この伯父のもとへ行くことにな  
ったからです。その頃長姉が東京牛込中里町に嫁い  
でいたので、ここから牛込小学校に通学しました。小  
学校を卒業後、成城学園の中学部に入學しましたが、  
中学四年生のとき、広島島の父が急死したので、私は広  
島に帰りました。父は、六十四才で死んだのです。

父の死後、私達一家は大須賀町の土地と家売って、  
同じ市内の白島九軒町一四九番地へ移り住みました。  
この土地、家は、私の家の所有でした。私は当時十九  
才でしたが、母と長男夫婦、子供三人の七人家族でし

た。そのうち、父の弟が、呉市本通四丁目で雑貨商を  
していましたので、この叔父の店で働きました。そし  
て、三年間位、叔父の商売を手伝いましたが、叔父と  
意見が合わず、広島市に帰って来ました。

それから、二十二才の時、広島市宇品町陸軍運輸部  
に勤務し、四十才まで十八年間つとめました。二十二  
才の時、得井ヒサ（三十才）と結婚し、同じ白鳥九軒  
町十二番地に新居を持ちました。私達夫婦の間には、  
子供はどうとう恵まれませんでした。前にも書きまし  
たように、四十才頃、陸軍運輸部を退職しました。

### 一片の骨もなく

二十年八月六日の日は、妻が腹痛で寝込んでおりま  
した。私は、妻の腹痛の薬を買いに一キロばかり離れ  
た薬屋に行きました。薬屋に入り調剤してもらって  
いた時です。突然、大音響がして、大きい爆弾が薬屋の  
五、六軒先の家にも落ちたように感じました。この  
薬屋は木造の建物でしたが、これがこの瞬間、あちこ  
ちくずれ落ちたので、私は飛ぶようにして一人で外に

出ました。幸いに、私は無事でした。外に出て見ると、  
今の原爆ドームの上空あたりに、「きのご雲」がたち  
こめておりました。私は、妻や家のことが急に気がか  
かり、走るようにして家に帰りました。帰る途中、道  
路に、もう十人余りの人が倒れて動けなくなっている  
のを見ました。又、家に近づくあたりで、附近の家か  
ら火の手が上っておりました。

家に着いてみますと、二階建の私の家は、家全体が  
北側に傾いておりました。妻は六畳の部屋に寝ていた  
が、原爆におどろき、寢床から立上りぼう然と立つて  
いたのです。私は直ぐ避難を思い立ち、五百メートル  
ばかりはなれた太田川川岸めざして、布団と蚊帳を背  
負い妻を連れて、川岸に行きました。川岸に着いてみ  
ると、附近の人達が、みんな避難して来て、この川原  
は一ぱいの人でした。私達はこの川原で一夜を寝ず  
で過して、朝を迎えました。避難して来た人の中で、火  
傷のため、川に入って死んだ人は数えきれません。川  
の水の満干で、これらの死体が、水が満ちると上流へ、  
水が引くと下流へと流されてゆく光景は、悲惨そのも

のでした。

私側の近親者は、無事でしたが、妻側の近親者は大変でした。当時、妻の実家は、市内横川町にありまして、妻の実家には父母は亡く、妻の兄弟も既に死亡して、その子の姪や甥がおりました。八月六日は、ちょうど、亡き父母の法要の日に当り、私達の住んでいる近くの心行寺に姪や甥が来ておりました。三十才代の姪二人、十八才の甥、姪の子二人計五人が寺内に入り、法要の始まるのを待っていたのです。この時原爆が投下し、お寺はくずれ落ちて燃え出しました。この五人は、おそらく、お寺の下敷となり、焼死したものだと思えますが、焼あとには一片の骨すら残っていませんでした。妻はこの法要に参列の予定でしたが、用事を思い出し、家に帰っていた時原爆が落ちたのです。このため、妻は助かったのですが、近親者五人のことを思つて夫婦で泣きました。私達の家も類焼して、その日のうちに、焼失しました。

#### 十六年間妻の看病

八月七日朝になつて、避難した川原をあとに、かねて私達の家財を疎開していた市内戸坂町の農家の知人をたずねました。知人のうちは、家族をはじめ建物全部無事でした。それ以降、私達はこの農家の座敷の間を借りて、昭和二十年十月頃まで住んでおりました。こうして、この農家に厄介になつていたのでありますが、この間、白鳥九軒町の焼あとにバラック建を建築しましたのが、十月末頃完成しました。このバラックに、私達は農家から引揚げて帰つて来ました。

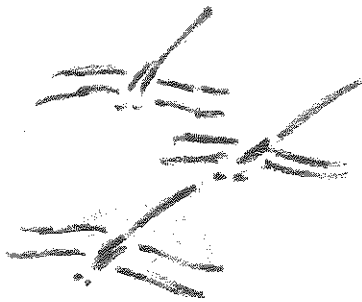
帰つてから早速、食糧に困りました。帰つたその翌日から何回となく買出しに出てゆきました。北は三次、南は能美島、東は尾道の向島にと、妻と一緒に食糧をたずね歩いたのですが、思うように売ってくれませんでした。そこで、私の親しい友人の姉の嫁ぎ先である四国の農家に友人とたずねて、香川県まで足をのばしました。こうして米を一斗、二斗と背負つて帰つて来ました。この香川県には、かなりの期間往復したものと

です。その頃の私達は、このように食生活に苦しみま  
した。そのうち、私達の家の隣地が整理されて、三〇  
〇坪ばかりの空地が出来たので、これを借り受け、小  
麦、さつまいも、じゃがいも等を作り、この収穫で食  
糧を確保できました。

こうして、二十一年十二月、前から病んでいた妻は、  
リウマチがひどくなって寝た切りになってしまいました  
た。住んでいたバラック建の家も建築後三年余になり、  
いたみがひどいので、之を取りこわし、このあとに本  
建築で平家四室の家を建てました。しかし、この家も  
土地付で、他人の手に渡りました。十六年間も病床に  
伏した妻の往診料、薬、注射など、医療費の借金が出  
来てしまったからです。そして妻は、二十八年十月に、  
薬石効なく四十六才で死亡しました。この十六年間、  
私は妻の病床で介抱に専念しました。妻が亡くなって  
からは、東白鳥町の「白鳥アパート」に移り住みまし  
た。こうして、妻の看病から離れ、市内本川町二丁目  
の中島鉄工所で働くことにしました。この鉄工所に昭  
和四十三年六月まで、勤めました。

### 新聞で知りホームに入所

中島鉄工所を辞めてから、近くの新聞販売店の集金  
の仕事をしておりましたが、年令も七十才を過ぎて、  
一人暮りで不便でした。昭和四十五年に新聞で、広島  
原爆養護ホームの開設を知り、私は進んで入所しまし  
た。入所してみても、本当に良いホームに入所出来たと  
喜んでおります。職員の方達にも親切にしてもらい、  
毎日を安心して暮せるので感謝しております。



# 被爆で柱の下敷になって

井上 ハツノ (79才)

被爆地…舟入本町・自宅家屋内で被爆した(爆心地より

一・五km)

当時の急性症状…左肋骨折・八月六日から二年間不具合で

困った。

頭 痛…八月六日から八月二十日頃ま

であり。

家族の死亡…該当なし

現 症…陳旧性肺結核

## 生いたち

山県郡豊平町で農業をしていた井上菊平、タツとの間に、一人娘として出生しました。耕作農地は、六段位でした。私は、豊平町の明倫尋常高等小字校を卒業、父母と一緒に農業に従事しました。二十才のとき、山県郡吉坂村の下岡次郎と結婚しました。主人が国鉄に

勤務していたので、私達夫婦は結婚直後、広島市三篠町に住みました。その後十年位して、事情あつて離婚しました。私は実家に帰りましたが、四カ月位過ぎて、山県郡八重町新市から田中逸二(四十才)に養子として来てもらい再婚しました。結婚直後、私達夫婦は広島市舟入幸町十五番地に家を持ちました。当時主人は、広島市吉島町の軍需工場に勤務しておりました。私は家事に従事していましたが、昭和十六年、肺結核になり、広島日赤病院に通院し、治療をうけました。私が病気になるつたこの頃から、実家の母に来てもらい、一緒に暮りました。

## 被爆時の状況

八月六日当日、私は母と一緒に家におりました。原爆投下の瞬間、光がピカッと目に入りました。同時に私の家の天井、屋根が落ちてきて、私は大きな柱の下敷になり、左手腕を骨折しました。その時、私は台所で朝食の後始末をして居た様に記憶してあります。ふと玄関の方を見ると、もう火災が発生しておりました。隣

家の主婦が、私が大きな柱の下になつてゐるのを見て、「早く出ないと、火に包まれるよ」と言いながら、私の体を引張るようになつてくださったのです。私は怪我をしていない右手を使い、助けてもらつて、ようやくはい出しました。急に母のことが気になつて周囲を探しましたが、見つかりません。

主人は、その日、軍需工場を休んで、隣組の組長の集りに出ておりました。集りが終つて帰宅途中で、ピカッと光つたのです。私の家の角で電柱が倒れ、その下敷になつて下半身が大火傷になりました。両ももの皮膚がたれ下つてゐるのを見て、私は目をおおいました。以前から、被災した時は草津町へ避難するように、隣組で申し合わせがしてあつたのですがとつきの事で私は、隣組の人達と一緒に江波町に向け避難しました。主人はこわれた家に入り、衣服をさがして、どうにか衣服を身につけ町内に残りました。江波町につく頃、空から真黒い油が降つて来ました。これをさけるため近くの防空壕に入ろうとしたら、兵隊さんが入つていて、私達は入れません。仕方なく舟入町へ引返ししまし

た。途中心配していた母とばつたり会いました。見ると、片足首の下方が指先に向け皮膚がむけて、赤身が出ていました。早速、母と一緒に引返ししました。私の家まで帰り着き、隣組の人達と居た主人と合流し、そこに居た二十人位で己斐町にたどり着きました。途中、橋が全部落ちていましたが、舟で向岸に渡つて、どうにか己斐まで行き、その晩はみんな近くのうり畑で寝ました。

### 被爆後の生活

翌八月七日朝七時頃、それぞれ身よりをたずねることに話が決まりました。私達三人は、山県郡八重町をたずねることにし、徒歩で三滝町へ、そこから可部線の電車で、飯室で下車して、飯室小学校に行きました。小学校はその時兵隊の宿舎になっていましたが、お願いして、ここで二晩泊めてもらい、小学校に着いて三日目の朝方、近くを通つてゐた八重町の知人に出会いました。その時、主人と母は被爆のため歩行困難な状態でしたから、この知人をお願いして、八重町に引返

してもらい馬車をやとってもらい、この馬車で八重町に行き、主人の兄の家に厄介になりました。

兄に長く厄介になる訳にゆかず、八重町十日市の借家を見つけました。この家は大きな家で、老人夫婦が住んでいました。この裏の二間を借りて一応落付きました。住いはこれですんだのですが、今度は食べる事です。ここに住んだ三方月間は、主人の兄嫁がよくしてくれ、米や麦を運んでくれました。一カ月位して、母は六十五才で亡くなりました。この頃、家主の老人夫婦から家を出るように言われ、仕方なく、近くの旅館の裏二階に転宅しました。ここに一年間住みましたが、それ以上おいてもらえず、隣家のおばあさん一人が住んでおられる二階建の家を借りました。この家には、三十年余り住みました。

主人はその後療養のかいあつて、八重保健所に勤務し八年間勤めました。その後、八重郵便局に勤め、死ぬまでこの郵便局で働きました。私は、この家に住んで三年たった頃、近くにあった一段ばかりの水田を借受け、昭和五十年まで農業に従事しました。主人の死

後、一人になっても農業は続けましたが、身体が続かぬようになり、しまいには農業もやめて、生活保護を受けて暮しておりました。そのうち、私の住んで居る借家が売りに出され、借家を出ることになりました。

#### 原爆養護ホーム入所前後

住んでいる家が売りに出されて、おられなくなつたので、親類の者とも相談し、八重町役場のすすめで広島原爆養護ホームを知り、入所することに心を決めました。昭和五十三年四月二十六日に入所しました。入所以来、毎日を楽しく、感謝の日暮しをしております。私は原爆の被爆者として、被爆後数年間、飛行機の爆音を聞くたびに走って物かげにかくれました。今でも、ホームで飛行機の爆音を聞きますと何か不安でなりません。又、親類の者の中には、被爆で全身ケロイドが出来て、このため、毎年のように身体に痛みが有つて、その都度、原爆病院への入院を繰返しております。これは、死ぬまで続くことでしょう。このように考えますと、戦争は二度とあつてはならないと思つており

ます。

## ひとりで被爆して

岡田 モモヨ (72才)

被爆地…舟入幸町(爆心地より一・五km)

当時の急性症状…なし

家族の死亡…なし

現 症…肝炎・肋膜炎・骨粗しょう症・尿路感染症・

胃下垂・白内障・高血圧症・糖尿病・動脈硬化症

## 生いたち

私は、尾道市栗原町で農業をしていた父・下川浦平、母・ウヨの長女として生まれました。九人兄妹でした。私の上には六人の兄がおりましたが、いづれも二十才代で病死しました。私の下に弟と妹がおりましたが、弟は赤ん坊のとき亡くなり、妹は四十二才で死にまし

た。私は、栗原小学校を二年で中退しました。父は、私が六才の時病死しました。私は栗原町で女中奉公に出で、そこに三年間つとめました。その頃は母一人で農業をしておりました。女中奉公をやめて、岡山県備中のサナダ帽子製造所で働きました。ここで二年働き、その後大阪府泉南郡の紡績工場に四年間つとめ、尾道市に帰って来ました。帰って来て遊んでいる訳にゆかず、尾道駅前の旅館に仲居としてつとめました。

二十四才の時、福山市の岡田松一(二十五才)と結婚しました。当時、主人は映画館の楽師として働き、私は喫茶店で働いておりました。結婚後は夫、夫の母、弟の四人で福山市紅葉町に住みました。夫の弟は福山市内の会社勤務でした。四年後、夫の姉の嫁ぎ先が広島市舟入本町にあり、姉の主人がトタン加工業をしていたので、夫はそこに行き、トタンの職を習い仕事をしました。少し日がたつてから、私が呼ばれたので行ってみますと、夫は肺炎で寝ておりました。しばらくたってから肺炎が治り、元のトタン加工で働きました。当時、私達は舟入本町の借家に住んでおりました。私

は寿屋で働きました。昭和十四年、主人に招集がきて、軍人としてシンガポール方面に行きました。私は舟入幸町に転宅し、三菱関係の中島製材所につとめました。

### いもの葉かげで死んだ人々

八月六日当日は、朝、製材所に出勤しようと弁当を手にして道路に出た時でした。ドカンと大きな音がして、その瞬間私は道路に伏せました。私の家の北隣の奥さんと私は立話をしておりましたので、その奥さんも、私同様、道路に伏せたのです。少し時間が経過して立上つてみると、私は怪我一つなかったのですが、その奥さんは伏せた位置が悪かったのか、起上つて見ると左腕の皮膚がたれ下り、ポロポロになつて居ました。

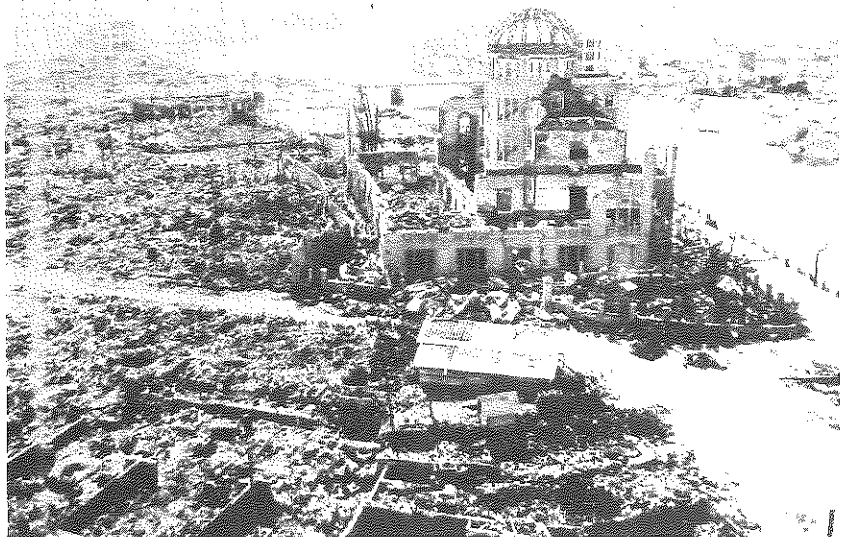
町内会で非常の時は、江波山に避難するよう申し合わせがしてあったので、私は早速江波山に行きました。ついてみて、何か食べるものはないかと探しましたがありません。腹がへって困り、舟入川口町の唯信寺に行きましたが、食べるものはありません。近くのいも

畑に行き、いもを掘つて食べようと、いもの葉を上にあげると、その下に死人がいました。よく見るといも畑のうねとうねの間、いもずるの下にも、何人ともなく死んでおりました。考えてみますと、体があついで、被爆者はいもの葉をかげにしたものと思います。お寺に帰つてみると或婦人のお産が始まつており、近くの人が見て居るだけでしたから、私は皆に指図してこのお産を片付けました。

私は疲れてしまつて身体を休めたい一心でした。それで建物として残つていた、原爆ドームに足を運びました。ついてみると、火傷した人でドームは一ぱいでした。仕方なく、私の勤めていた製材所の監督さん宅が、大芝町にあつたのでそこを訪ね、一週間ばかりお世話になりました。それから、家のことが気になつたので、舟入幸町に向け帰途につきました。

### 土手の草を枕に

大芝町から自宅に帰る途中、相生橋を歩いていたら、以前、金を貸した人にばったり会い、金を返してもら



産業奨励館の残骸、現在原爆ドームと呼ばれヒロシマのシンボルとなっている（米軍撮影・米国防軍病理学研究所返還写真）

いました。舟入幸町に帰りましたが、私の家も近所の家も皆倒れて、手のつけ様ありませんでした。知人をたずねて安佐郡の温井へ行き、そこが農家でしたから、農業の手伝いをして三カ月位居ました。ずっと一人で、子供もおらず、食べものについては割と不自由ませんでした。

舟入幸町に帰って来て、手持ちの金で、進駐軍の煙草を仕入れてこれを売り歩きました。又、その頃、己斐の闇市場に行き、餅や寿しを造って商売しました。寿しの材料の米は、安佐郡鈴張に行ったり、佐伯郡水内に行って、仕入れの交渉をしました。その頃は、大芝町の土手の草を枕に寝たものです。そのうち、舟入幸町にバラック建の飲み屋が出来たので、ここで働きました。

昭和二十年暮に、主人が復員してきましたので、舟入本町の煙草屋の二階を借り、主人は近所の製材所で働くようになりました。その後、夫婦共働きで生活しておりましたが、昭和五十四年五月頃、主人が病気になる入院しましたので、私はこれの看病をしましたが、

その甲斐なく、その年の十一月に死亡しました。  
一人暮らしとなり、頼る処、住む家もないので、近くの民生委員のお世話で当ホームに入所しました。ホームは、入ってみて申し分はありませんが、ただ入所者同志の間関係で気を使います。

## 美しいネオンサインが

こわれて

横 竹 タ マ (80才)

被爆地：横川橋付近・屋外（爆心地より一・五km）

当時の急性症状：負傷なし

家族の死亡：なし

現 症：関節炎・脳動脈硬化症・慢性胃炎

## 生いたち

私は、大阪市浪速区恵美町二丁目二で、父・高須又

三郎、母・コトとの間に男子三名、女子三名中二女として出生しました。父は、肺炎になり昭和十六年十二月二十二日死亡し、母は、昭和十五年二月二十七日心臓マヒで亡くなりました。兄は、大阪で豊製造業を営んでいましたが、六十二才でこれも心臓マヒで亡くなりました、弟（二男）は京都で、フクサ製造を商売にしていますが、肺炎のため七十一才で亡くなっています。

三男は大阪の実家で、これも心臓マヒで二十三才で亡くなり、姉は、五十八才の時肺炎で死亡し、妹は十二才で病名は記憶しておりませんが大阪で亡くなっています。

私は、小学校は大阪市恵美須小学校を卒業しました。二十才の時縁あって広島に来て、平田唯男（二十二才）と結婚するも子供はなく、夫は結婚後十年で心臓マヒで亡くなりました。当時は紙屋町で商売をしていました。

夫が亡くなった後も、使用人を二名つかい菓子類、ビール、サイダー等を売っていました。戦時中の事で、兵隊さんは夜中でも出発されるので、広島はどうなる

かと心配の毎日でした。西練兵場に衛戍病院が出来たので、ご近所の人と夜八時頃から甘酒を鍋に一杯つくり、店の品物を持っては良く見舞に行っていました。私の店は、当時では珍らしかったネオンサイン（森永の菓子、賀茂鶴の宣伝）を付けていたのできれいであり、このネオンサインをわざわざ見物に来る人もありました。ところが戦争もはげしくなり、市から疎開する様にすすめられ、七月末、亡夫・平田唯男の実家である旧安佐郡安に疎開しました。

### 被爆時の状況

当日朝は、安から横川町に居住していた友人に会うため家を出ました。横川橋のところでは被爆したのですが幸い私は負傷もなく、周囲におられた人達と一緒に、次に何が起ってくるか解らぬので恐しく、命からがら安に逃げ帰りました。帰る途中、道に倒れている人、血ダルマの様になった人達を見ましたが、どうしてあげる事も出来ませんでした。あの被爆の恐ろしさを思い出し、二度と戦争をしてはならないと思います。私は、

お蔭様で被爆者の方々が言っておられた、下痢・脱毛・発熱等の症状もありませんでした。

当時の食物は、安に疎開していた関係で時には闇買いもしましたが米、魚、野菜等余り不自由はしませんでした。

### 再婚―死別

昭和三十三年五十七才の時、再婚の話しがあり横竹植市（当時六十九才でアメリカ帰りで正業はなかった）と結婚し、広瀬町に家を建てて暮し、私は和裁をして小遣いにしていました。昭和三十三年六月五日から三十七年一月二十四日までは、貧血症で認定患者の取扱いを受けていましたが、その後は認定第二特別の扱いを受ける事になりました。

夫は、昭和四十四年三月二十八日（八十二才）突然心臓マヒで他界し、又私は独り者になってしまいました。昭和四十九年七月足をすべらし、二階から転落し、頭部の打撲で大内病院へ二十日間も入院治療した事もありました。独り暮しの淋しい生活を過していました。

同じアパートにいた人から、当ホームの話聞き、自ら入所する事にしました。ホーム入所は、昭和五十年十月三十一日でした。

皆様に良くして頂きまして、日々感謝しています。クラブ活動も盛んに行われており、私も書道クラブに入り、一時体調を悪くして中止していましたが、又始めています。両足のうらに軽いしびれがあり、整形外科病院に通院し治療を受けています。

## 被爆死の妻をさがして

新宅 良 (77才)

被爆地・横川町・自宅玄関で被爆(爆心地より一・五km)  
当時の急性症状・全身倦怠感(八月六日から約一カ月間)  
下痢、嘔吐(八月六日から十日間あり)

家族の死亡・妻が被爆死(可部町小学校)  
現 症・動脈硬化性心障害・腎障害・関節炎・老人性痴呆

### 生いたち

私は、山県郡原村の農業、父・新宅惣次、母・ミスとの間に、五人兄妹の二男として生まれました。姉、兄は、私より三、四才年上でしたが、どちらも生後間もなく死にました。私は原尋常小学校を卒業し、二十五、六才頃まで家業の農業を手伝って生活しました。二十六才の時、山県郡吉坂村の田村ミサヲ(二十才)と結婚し、夫婦で農業を手伝いました。結婚後一年して、父が亡くなりましたので、私があとを継いで農業をやりました。更に一年後に、長女・市枝が生まれました。

私が広島市で勤めるので、広島市横川町に転宅し、東洋工業に一年ばかり勤めました。それから、市内宇品町にあった糧末支廠に勤務し、昭和十三年頃まで勤めました。糧末支廠を退職した頃に、長男・正宜が生まれました。当時親類の者が運送の仕事をしていたので、この道に入り、終戦の年まで七年間勤めました。この頃、次男・力が生まれました。昭和二十年三月、

可部町の義姉の家に疎開したのですが、私だけ一人横川町に残りました。当時、私が住んでいた横川町の住宅が、疎開のため家をこわすので、可部町に居た妻を呼び、横川町で八月六日を迎えました。

### 妻爆死す

八月六日当日、横川町の住民は、土橋町の建物疎開の当番に当たっていたので、妻は朝早く土橋町へ行きました。私は家に残って、家の中の片付中でした。原爆が投下されたときは、家の前の電柱から火柱が出て、周囲がものすごく光りました。直ぐ外へ出てみたら、前の家が焼ける際中でした。当時、私の家は二階建てでしたが、一階に降りたと同時に原爆が落ちたのです。外に出た直後、二階がくずれ落ちてきました。家の前の道路には、人影一つ有りませんでした。次の角を曲って見て驚きました。百人位の人が、怪我をして道路に一杯でした。私は手のくだしようもなく、横川の電車道へ出て三滝町へ歩いて行きました。

可部町の妻の姉の家をめざして帰る途中、長束では

ったり知人に会い、「お宅の奥さんは全身火傷で、三滝病院におられますよ」と聞いたので、早速三滝町に引返し病院をたずねました。が、妻は居ませんでした。附近の人の話で、山の方へ連れて行つたと聞いたので、山をたずね歩きましたがわかりません。そのうち夕方になつたので、仕方なく、次男を連れて可部町に行きました。それから毎日のようにつぎの日も、つぎの日も、弁当をこしらえてもらつて広島へ出、妻をさがし歩きましたがわかりません。

### 独立する子供たち

二週間経過した二十日頃のこと、己斐町に被爆者の書出しが出ていることを知り、早速行ってみました。見ると妻の名があり、八月七日可部町で死亡したと書いてありました。止むなく、私、長女、長男、次男親子四人で、可部町の妻の姉の家にその年の十一月まで住みました。当時、私の姉が山県郡吉坂村に嫁いでいたので、これを頼って吉坂村に行き、妹の家の近所の空家を借りて住みました。田を借りて、農業をして親

子が生活しました。それから、二年位して、住んで居た借家を売ってもらいました。そして、ここに昭和四十九年五月まで三十年近く住みました。この間、長男・正宜は広島市に出て、調理師の職を身につけ、二十三才頃に、呉の娘と結婚しました。長年、母親代りをしてくれて居た長女・市枝も、昭和三十八年に結婚し、家を出ました。次男・力も兄同様に、調理の職をならうべく、広島市に出て行きました。

昭和四十二、三年頃、私は両足にむくみが出て、吉坂病院に通院しました。昭和四十五年頃、この病院の先生と福祉事務所の職員のすすめで、その年、五月二十日、広島原爆養護ホームに入所しました。入所してみますと、至れりつくせりで、何も言うこともありません。ただ、感謝のみであります。

## 兄一家が全滅して

岩北良江（69才）

被爆地・段原日出町・実家の縁側（爆心地より一・六km）  
当時の急性症状・腰部打撲  
家族の死亡・長姉ワカヨとその夫。次姉シズヨとその夫。  
次兄隆男とその妻とその長男。

現 症・膝関節結核後遺症・慢性肝障害・動脈硬化・貧血

### 生いたち

私は、高田郡白木町で、父・山田光太郎、母・ツユの間に、七人兄弟の、四女として生まれましたが、戦死、被爆死で兄姉を失い、現在は、段原町に妹の繁子と、その長男・静男夫婦がいますだけになりました。

私が五才の時に、それまで、白木町で農業を営んで居た両親が、西条西志和に引越しました。私は西志和

小学校を卒業し、当時広島市油屋町に居た、次兄・隆男の家から進徳女学校に通い、卒業後、昭和七年、遠縁に当る岩北福美と結婚しました。昭和九年に長女を出産しましたが、昭和十一年に、主人が肺結核で死亡し（二十七才）、長女も十三年に三才で亡くなりました。私も産後体調悪く、働く事も出来ずに、入院退院を繰返しながら、闘病生活を送っていました。

そのうち、次第に戦争が激しくなり、一人暮しも心細く、当時段原日の出町五〇八に住んでいた両親の許に帰って、一緒に暮して居りました。両親はまだ健在で、野菜作りなどをして居たので、戦時下の耐乏生活にも、わりに恵まれた明けくれでありました。

### 太陽が落ちる

二十年八月六日、原爆投下の朝は、一旦空襲警報が解除となり、ほっとして、母は野菜を持って親類の処に出かけました。

父と私は縁側に座って話しをして居ました。〃眩しい閃光〃恰も太陽（火の玉）が落下するのを目のあた

り見た様な状態で、〃ピカドン〃とはよくも名付けたものだ、後で思いました。暫らくして気が付いた時には、爆風の為、凄惨な、変り果てた状況で、塀と壁、硝子、戸などが木ッ葉微塵となり、部屋中踏場もない程に埋れて、呆然として居りました。

外出中の母は、日傘が幸いしてか、少しのかすり疵で帰宅しました。その日の夕方、田舎の親戚の者が安否を気使って迎えに来て下さったので、ひとまず母の里・西志和に避難させ、私は身内や隣組の連絡のため一人淋しく留守を守って居りました。打撲のあとが化膿し、痛みで眠れない夜が続きました。

爆心地の近くに住んでいました兄、姉、義兄、義姉、甥と七人の縁者が被爆死をし、内兄嫁と甥は、今だ不明の状態です。

### 闘病十数年

終戦後には賀茂郡八本松飯田に、父母と疎開して居りましたが、不便な田舎の生活で、然るべき治療も出来ず、次第に身体衰弱し、高熱が続きました。二十二

年一月六日に、西条療養所に入院して居ましたが、結核性眼病で視力も弱り、二十九年に、日赤病院に転院の身となりました。翌三十年、退院する事が出来ました。それもつかの間で、三十一年には、股関節結核による左下肢体幹機能障害で、西条療養所に入院。数回の手術を受け、キブスベツトで絶対安静の日々を送り、三十八年十二月に、やっと退院、自宅療養となりました。

顧り見れば、十数年に亘る闘病生活で、幾度も生死の淵をさまよつて居る間に、戦後の混乱期も過ぎていきました。大分時勢も落着き、医学も進歩して、私を絶望の淵に落した排膿も、漸く癒えて、やっと生きる希望が持てるようになりました。

その間に、二十四年、父が死亡し、四十年には、一番頼りにして居た実姉と、その長男とが自動車事故に逢い、姉は即死、甥は、それが原因で二年後に亡くなりました。

四十六年に、母が九十三才で亡くなりましてからは、身障の身で、食事、入浴等も不自由なので、一人暮し

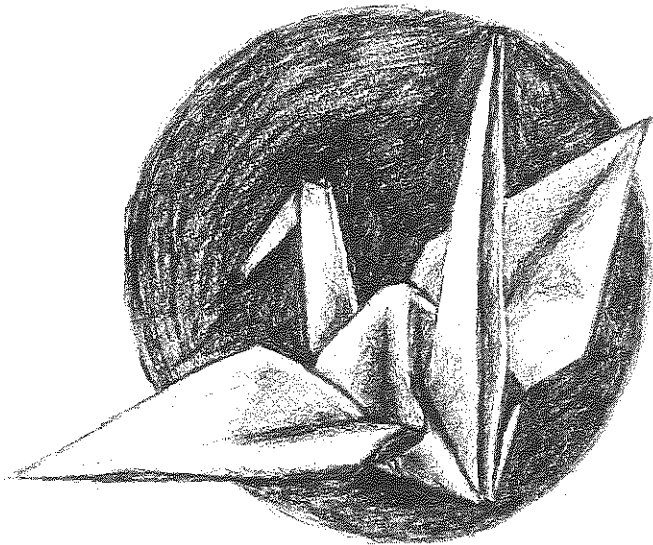
### 広島原爆養護ホームの歌

安芸の宮島 真向いに  
流れの清き 太田川  
瀬戸の内海にそそぐ所  
明るき 原爆養護ホーム  
歴史にとどむ 原爆に  
余生は一人と 定まるを  
今はホームの 友どもと  
憩える原爆養護ホーム  
花の宴に 踊りの輪  
四季の旅行に 法話と  
今幸の 朝な夕な  
楽しい 原爆養護ホーム  
若きあの日を 思い出に  
感謝の念は おのずから  
平和の鐘は 鳴りひびく  
安らう 原爆養護ホーム

が不可能となり、精神的にも、不安でたまりませんでした。西条の福祉事務所に御願いして、原爆養護ホームに入所させて戴きました（昭和四十七年五月）。

### 老いへの不安

入所致しまして、早くも八年を過し、古稀を迎える年となりました。今更ながら痛感する事は、今後又、万一病魔に見舞れ、最悪の事態になっても、与えられた運命に従順に従い、元氣な間は日々を大切に、余生を過したいと思えます。でも、こうした恵まれた環境、充実した毎日でも、ふと、忍びよる老いへの不安にかられる時があります。閉ざされた気持になった時には、原爆養護ホームの唄の歌詞を味い乍ら口吟み、自らを励まし、慰める、今日このごろでございます。尚、この平和な日がいっまでも続く事を、ここから祈っております。



# 爆風の土煙りの中で

多田 照子 (81才)

被爆地・西白島町・居宅の屋内(爆心地より一・七km)

当時の急性症状・発熱、脱毛、体の方々に紫斑が出来た。

(原爆症)

現 症・脳動脈硬化症・貧血症・認定病(顆粒球減少症)

## 生いたち

私は安芸郡温品町で、明治三十二年八月十一日、父・若山武登、母・マスの、長女として生まれ、兄が四人、妹が一人で七人兄弟でした。

父は小学校の校長をして居りました。子供の頃はわりと、平凡ながら幸福な生活で、広島女学院を卒業後、家事の手伝いをして居りました。大正十年二十二才の時、天津の綿花製造会社に勤務して居た多田幸作と結婚し、男子二人を出産しました。

昭和三年、主人が急性肺炎で死亡し、六才と、三才、

二人の子供を連れて内地に帰り、大阪の洋裁学校で三年間勉強。広島で双葉洋裁学校を創立しましたが、三年後に、色々な事情で通信局に務めるようになりました。

昭和十六年長男が北支で戦死し、祖国の英霊として祭られました。苦労を重ねて育てた子供、母としては断腸の思いでございました。

## 被爆時の状況

昭和二十年、戦争も次第に激しさを加えてきました。当時は、昭和町から通信局に通って居りましたが、通勤の途中も危険になって来ましたので、少しでも近い所へと思い、白島町の福田様方の二階へ単身間借りをし、家族は全員温品村の私の実家に疎開させました。

八月六日原爆投下された時刻には、丁度家の中に居りましたが、ピカ!!ドーン!!大爆発音と共に、二階がぐらぐら揺れだしたので椽側に飛び出した途端、家が倒れて下敷となり、意識不明となり、気が付いた時には、身の廻りは、真暗闇でありました。無我夢中でも

がいた拍子に、天井のあたりに穴があきましたが、土煙りで呼吸も苦しく、あえぎながら、くずれ落ちる物音と共に外に飛び出しました。

あたり一面の硝子の破片に足を取られながら、逃出す途中で、声をかぎりに、「助けてくれ」と叫んで居る人を連れて、長寿園に避難しました。暫らく休んで水源池まで行き、見も知らぬ怪我人をおぶったり歩かせたりしながら、やっと夕方頃に戸坂小学校の治療所に連れて行き、傷の手当を受けさせました。その夜は農家に泊らせて貰い、翌朝通信局に帰り歳入事務に付きました。

### 被爆後の状況

八月七日の朝から、通信局に行き勤務に付きました。一週間で埋り込んでから、体の方々に紫斑が出来て、次々頭髮が抜け落ち、高熱が出る様になりました。一週間に、通信病院に入院しましたが、沢山の怪我人や原爆症の方々と埋って居りました。お灸を握えると白血球が増えると聞き、同室者同志で灸療法も致しま

した。

四十日位で体調快方に向い、五十日位いで退院し、暫らくの間通信病院に務めました。通信病院を退職してからは、それこそ、色々な所で働きましたが、原爆症の後遺症のため体調悪く継続きませんでした。

昭和三十二年貧血のため、市民病院に入院し、同年十二月二十四日顆粒球減少症で認定されました。退院後も週一回の通院を続けて居りましたが、四十八年三月頃より時々心臓発作がおきるようになりました。

### 命かけ核廃止を願う

長男は戦死し、次男夫婦に世話になって居りましたが、孫を入れての六人暮りで、家も狭く、他の事情もありまして、昭和四十八年十月二十五日、市役所の御世話で原爆養護ホームに入所させて戴きました。

思えば、大東亜戦争の勃発以来、永い年月の間に、両親、兄弟、長男と次々に死別しました。温品の実家にいる兄の巖と、明石市にいる妹の中川みどりと三人だけとなった淋しい人生を振り返り、体調も悪く、眠

られぬ夜が続いて居りました。原爆養護ホームに入所しましてからは、何から何まで行き届いた処置で、俳句・造花・お習字等、色々なクラブに入り、幸福な日暮しをさせて戴き、何の不満もなく、感謝の日々を送って居ります。次男夫婦も、孫達も、休日には度々慰問に来て、孝養振りを發揮してくれますが、唯一つ、あの恐しい原爆投下の事を思いますと、私の体や心の疵が痛みます。最後に、いまわしい核の廃止を、命をかけて、全世界の方々に御願ひ申し上げます。

## 被爆死の夫の遺骨も

みつからないまま

増田 コイシ (82才)

被爆地・松原町・風呂屋(経営)屋内(爆心地より一・七

km)

当時の急性症状・負傷なく、急性症状なし

家族の死亡・夫が被爆死(市内白鳥町)  
現 症・白内障・脳動脈硬化症・高血圧症

### 生いたち

私は高田郡吉田町字川本で、父増田住蔵、母・ハツミとの間に、男二人、女五人のうち長女として生まれました。学校は、可愛尋常小学校を出ました。兄(長男)は生まれてまもなく死亡し、弟(六十七才)は、高田郡可愛村で百姓をしています。二女(七十四才)は胃ガンで亡くなり、三女(十六才)も亡くなっています。健在しています妹達は、四女(六十五才)五女(六十二才)で、高田郡丹比でいずれも百姓をしています。父の亡くなった年令は記憶していませんが、胃ガンだったと思います。母は、七十三才の時亡くなっています。病名はこれもおぼえていません。

私は、二十一才の時同郷(吉田町)の上山訓二(当時二十三才)と結婚して、呉市坪中一七に世帯を持ちました。夫が理容師の資格があり、開業していました。二十三才で男子を出産しましたが、子供は三週間後急

性肺炎で亡くなりました。夫は、六年後（二十九才）一週間の患いで、あの世の人となりました。

その後二十八才で、小林三藏（五十九才）と再婚し、義理の息子・娘と同居する事になりました。当時は比治山町に住んでいましたが、昭和二十年頃は、松原町で旅館と風呂屋を経営しておりました。旅館は仲居さんを四・五人使い、風呂屋は、風呂炊きを一人雇い、番台は夫と私が交代で番をしていました。当時は戦時中の事で、旅館は兵隊さんばかりお世話しておりました。毎日忙しい日を過しておりました。

### 被爆時の状況

八月六日の朝・八時前に夫は、姉（夫の姉）の危篤を白鳥町の親戚へ知らせに出かけた後の事でした。私がお客さん（旅館と風呂屋は同じ家で経営していた）を玄関に送り出した時でした。パツと光り、まるで光の中にある様に思った瞬間目の前が真暗になり、気が付いた時は足に色々な物が落ちていて、少し負傷をしました。そばに有ったタオルで足の傷をしばり、避難場所

としてきめてあった西練兵場へと避難しました。働いていた仲居さんもそれぞれ避難しました。

夫は白鳥町の親戚からは出たと後で聞きましたが、何処で被爆死したのか、死体すら解りません。夫の実弟が市内を随分探してくださった様ですが解りませんでした。その弟も暫らくして亡くなられたと聞かされました。お気の毒な事でした。

私は東練兵場へ避難する時、向隣りの足駄屋・野上さんの奥さんが「松の湯の奥さん——、助けて——」と何度も何度も叫ばれてもどうしてあげる事も出来ず声を後にしました。又何処かの子供さんが「お母ちゃん——、お母ちゃん」と泣き叫ぶ声を聞くも、どうしてあげる事も出来ず練兵場へ逃げました。当時の食物は、旅館をしていた関係で割合何も不自由はしませんでした。

### 被爆後の生活

八月六日の夜は、東練兵場の山の家（ガラス窓の壊れた家）に泊り、八日まで厄介になった。後、府中町（近

所の人達が集団で逃れた)に行き、私は知人(寺田)をたよって、八月十六日頃まで寺田さん宅にお世話になっていました。何時迄も厄介になっているわけにも行かず、十七日に高田郡吉田町(実家で弟が住んでいた)へ帰り、約一年居住しました。その間十月頃だったと思いますが、元の松原町に行つて見ましたが、後片もありませんでした。あの八月六日の事を思えば、今でも涙が出てなりません。

その後は広島市内(山根町)に居住する義理の娘(佐伯ヨシ子)の家に同居し、世話になりました。被爆時は足の負傷のみで、急性症状もなかったのですが、昭和五十一年頃から血圧が高くなり治療を受けていました。同年十二月腸が悪くなり、県病院に一カ月入院し、手術を受け、昭和五十二年五月再度県病院に入院し、今度は右脱腸の手術を受け、約一カ月入院し退院しました。白内障は通院治療をしていました。

### ホーム入所前後

体調も余り良好でなく、義理の娘の家に何時までも

同居しているのも心苦しく思っていた時、姪(弟の娘・尾世キミコ)が当ホームの話しを知らせてくれたので、飛び立つ思いで入所手続きを済ませ、去る昭和五十三年十二月十九日に入所出来ました。入所後約二年になります。先輩の方々、職員の皆様にも良くして頂き、感謝の日々を過しています。去る昭和五十五年一月十四日に左そけいヘルニアで藤井外科病院へ入院、手術を受けました。一月二十八日(十五日間)に退院し、今日迄お蔭様で元気に過ごしています。本当にありがとうございます。

## 爆風で顔や首にガラスが

吉原 コユウ (76才)

被爆地…大須賀町(爆心地より一・八km)

当時の急性症状…なし

家族の死亡…なし

現 症・動脈硬化症・骨粗しょう症・白内障・腰痛症・

肋膜肺腫

生いたち

私は、父・吉原梅次郎、母・アサとの間に、三人姉弟の長女として生まれました。当時、家は芦品郡府中町に在り、両親とも専売局に勤めておりました。私が四才の時、一家は広島に出て広瀬町に住みました。小学校に入る少し前頃、一家は段原大畑町七十七番地に転宅しましたので、私は段原小学校に入学し、同校を卒業しました。卒業後、両親が勤めていた専売局に三年ばかり勤めましたが、十七才の時、市内台尾町の大村実次（十八才）の処に嫁ぎました。私が十九才の秋に、長男・肇が生まれました。しかし、事情があつて、私が二十三才の時、長男・肇を連れて実家に帰りました。

その頃、父は病身のため専売局を辞め家に居り、母だけ勤めておりました。昭和七年、私が二十七才の時、薬研堀で父が商売を始めましたので、私はこれを手伝

いました。が、この商売も昭和十二年満州事変が起きた頃にやめました。家も、この頃上大須賀町に転宅しました。父も軍属となり、船に乗りました。長男・肇も十八才になり、広島鉄道管理局に勤務するようになりました。昭和十五年、父を除いた私達一家は上海の知人を訪ねて転住しました。上海に着いてからは、母と私は家事に従事し、妹は大使館に勤めました。そのうち、妹はタイピスト養成所に入り、タイピストとして華中蚕糸に勤務しました。長男・肇も華中鉄道に勤務となつて上海に來ましたが、現地招集となり、通信兵として勤めました。

そのうち、戦争も激しくなり、昭和十九年五月、母は一足先に帰国し可部町に住みました。私と妹は昭和十九年の暮に着のみ着のまま引揚げ、下関港に着きました。先に帰国した母の居る可部町に私達は落着きました。昭和二十年六月には、父も船からおりて一緒に住むようになりました。妹は軍属として第二總軍參謀本部人事課に勤務し、私も軍属として被服支廠皮革検査部に勤めました。

## 被爆時の状況

私は六月に職場で怪我をして以来、ずっと仕事を休んで家に居ました。原爆投下の当日八時頃、空襲警報が解除となり、防空壕を出て家に帰り玄関に入ると同時に、ボツとした音が聞こえて、あたりが急に真暗くなり、爆風でガラスが飛び散り、この破片で顔と首がチカチカしましたが、すぐに外に飛び出しました。私が出たと同時に、私の家は倒れました。今少しゆっくりしていたら、私は家の下敷になった事と思います。あとから考えてゾツとしました。

その日父は、可部町の母を訪ね早朝帰宅し、裸になって汗をふき乍らひと休みしていた時、原爆が落ちたのです。この時、天井が上から落ちて来て、身動き出来ないうちです。やっとはい出して、裸でいたので全身打撲外傷の身を、足を引きづりながら、母の居る可部町に夕刻頃やっとなどり着いたそうです。私は直ぐ出汐町の被服支廠にかけつけましたが、被服支廠は建物が煉瓦造りでしたから、大きい破損もなく、怪

我人も余りなかつた様に思います。その頃、外部での怪我人がほとんど被服支廠内に入って来ました。私は、顔や首のガラスの破片を近くに居た友人に引抜いてもらいました。自宅から二キロばかり離れた職場に走るようにして来たのですが、途中や周囲の状況は、私の記憶に全く残っていません。

被服支廠での私達は、全職員禁足令が出て、その晩は全員泊りました。翌七日昼頃から、家族連絡のため三時間の許可が出たので、私は大須賀町の自宅に帰ってみました。自宅は全焼し、近所の人々がトタン小屋に入って居たのを見ました。私の家は当時の東練兵場の近くでしたが、原子爆弾の被災者で広い練兵場が一杯となり、死がいの山が出来、その周囲を怪我をした人が動いており、その惨状は目をおおうばかりでした。

三時間の許可しかない私は、又、被服支廠に帰りましたが、夕方になって解散命令が出ました。私は妹が気にかかるので、第二総軍参謀本部に行き、書類を疎開中の妹に会いました。妹の無事な顔を見て安心し、六日の朝のことをたずねました。出勤簿に印を押して

いた際に原爆投下があつたそうです。私は妹と別れて、その足で可部町に向い夜中に帰り着きました。妹は、其の後八月末まで勤務し、可部町の私達の処に帰つて来ました。原爆で全身打撲と外傷を受けた父は、九月末まで傷の手当が必要でした。

### 被爆後の生活

私達は可部町で家を購入し住みました。食糧については、同じ町内の知人の農家から米をわけて貰いました。野菜は近くの畑を借り、大根、なす、南瓜など植付けて食べました。おかげで食糧については、私達は割と不自由しませんでした。この頃は、多少たくわえもあつたので、預金を引出して生活して居ました。

その後両親は野菜づくりで生活し、妹は、安芸郡海田町の復員局に勤務しました。長男・肇も二十年秋に復員し、この頃は皆一緒に生活しました。昭和二十二年初めに長男は家を出しましたが、其の後は音信不通でした。妹は復員局が解散して家に居りましたが、昭和二十四年に結婚して家を出しました。私も、昭和二十七

年頃から働くことにしました。最初、町内の建材店の帳面づけを二年間やりました。その後昭和二十七年頃から、家政婦として働きました。その頃、市内平田屋町に住んでいた妹の処に同居して働きました。そこに三年位住んで、妹達が市内舟入川口町に転宅したので、私も一緒に転宅しました。

昭和四十四年四月に、父が心臓病で病死しましたので、母は弟が引取つて面倒をみました。昭和四十九年に、妹達が市内庚午中二丁目のマンションに転宅し、私も近くの庚午中三丁目に家を借りて住みました。この間ずっと家政婦として働きましたが、身体が弱ってきて足腰も悪くなり、昭和五十四年三月に家政婦をやめ、手持の金で生活しておりました。

### 広島原爆養護ホーム入所前後

昭和五十四年夏、原爆検診の受診のため舟入病院に行きました。ここで昔の友に会い、お互いの現在の生活について話しました。その友から、広島原爆養護ホームのことを聞かされ入所を決めました。それから広島

市役所に相談に行き、申込をして帰りました。昭和十五年二月に入所しました。

入所前の生活の不安、病気の不安がなくなって安心してあります。ホームでは、職員の人達に心から世話してもらって、感謝しております。ホームにはいろいろなクラブがあり、四季おりおりの催しも有って、入所者のための配慮がしてあります。私は皆さんに可愛がって頂いて、死ぬまでこのホームにお世話になりたいと心から願っております。

## 原爆のため妻を亡くして

寺 西 良 市 (74才)

被爆地：楠木町・広島兵機製作所(木造)工場内(爆心地より二・〇km)

当時の急性症状：全身倦怠感(二カ月間)・頭髮脱毛

食欲不振(一カ月間)

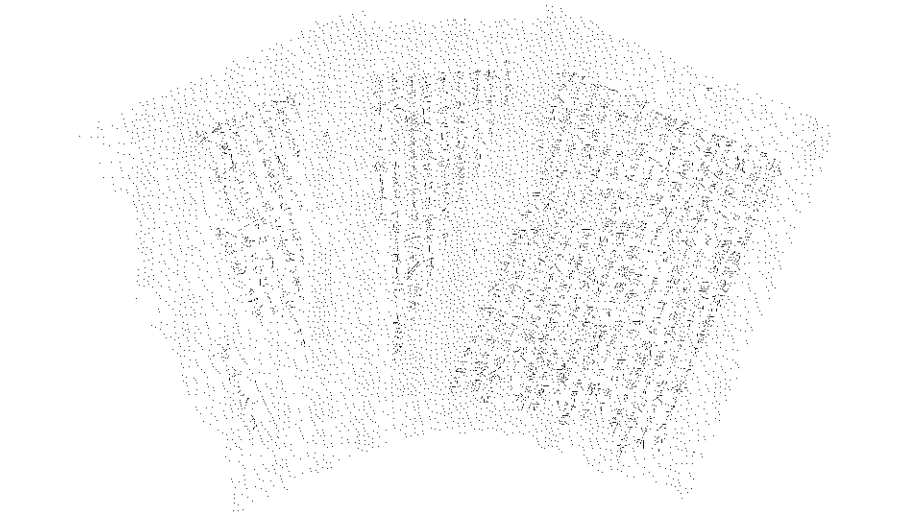
粘液便(一カ月間)

家族の死亡：妻が被爆死(市内小網町辺)  
現 症：肝硬変の疑・腎硬化症・白内障

### 生いたち

私は、農家の父・寺西紋造と母・スエとの間に、五人兄弟の次男として、可部町三入で出生しました。兄弟は、兄一人、姉三人でした。兄は家業を継いで農業に従事し、長姉は明治四十四年、私が四、五才頃、結婚のため渡米。次姉は大正の始め、可部町三入の私の家から四キロ離れた農家に嫁ぎました。三番目の姉は、大正十年頃、市内愛宕町に嫁ぎましたが、昭和初年、主人が大連市に転勤になったので、子供一人を連れ、主人と三人で渡満しました。この姉は、終戦前に病死しました。

私は三人高等小学校に入学、高等科一年を終了して、市内内柳町の立石商店に店員として勤めました。ここで昭和四年まで勤め、翌昭和五年に独立して、市内京橋町で織維関係の商売を始めました。この年木川ミヤ子(十八才)と結婚し、一緒になって商売をしました。



寺西良氏手記原文

昭和七年三月十日長女・良子が生まれました。昭和十二年になって、繊維が全部統制となったので、仕方なく商売をやめて、単身、東京に出て神田有楽町の三省堂の店員として働きました。その頃妻は、長女・良子を連れて、可部町三人の私の実家で生活しました。その後、昭和十三年六月十二日次女弘子が生まれました。昭和十四年三月、東京蒲田区にあった東京計器製作所に徴用がかかり勤務しました。昭和十九年四月、東京大空襲で東京計器製作所も駄目になり、会社が再起するまでと考え、広島市に帰りました。帰ってから、楠木町の広島兵器製作所に入社しました。帰広直後の五月に、可部町三人の兄の家に居た妻と娘二人を呼んで、親子四人で生活しました。この頃広島も戦争が段々大きくなるし、危険を感じたので、七月に、娘二人を可部町の私の実家に疎開させました。

夕暮れの暗さ

昭和二十年八月六日、私は広島兵器製作所の工場内で旋盤の仕事をしておりました。朝八時すぎ、急に周

囲が夕暮れのような暗さになり、これが原爆投下の瞬間だったのです。この工場は木造建で、上から屋根が落ちてきました。私はこの時、旋盤の下にもぐり込みました。少し時間がたって、私はそばにあったハンマーで周囲を払いのけ外に出ました。その日、工場内には五十人位居ました。このうち三十人位が外に出たように思います。私達は、新型爆弾が工場の真上に落ちた様に感じました。私は、走って大芝公園の川岸に避難しました。既に五十人位の人が居ました。私は、當時三篠四丁目に一軒の家を借りて住んでおりましたが、この家が心配で、急いで帰宅しましたが家は無事でした。しかし近所の家が燃えているので心配になり、近くのポンプを押して馬穴に水を汲み、四十ぱいも、五十ぱいも、私の家に水をかけました。

妻は、町内婦人会が建物疎開の当番になっており、八月六日、四十人位の人数で市内小網町辺に行き、被爆死しました。今日まで骨すら見つかっておりません。私は翌日から早速、足の続く限り妻をさがして歩きました。「あれでも、防空壕の中に倒れているのではあ

るまいか」。私はこのため身体がだるくなり、頭髪が抜け、食欲がなくなり、便もうみのような排便で、この侃では死んでしまうのではないかと思いました。それで、大林の吉川病院に行き診察してもらいました。その時ももらった薬が良かったのか、体が復調してきました。こうして、妻をさがし歩いた際に、八月九日だったと思います。私の家もとうとう焼けてしまいました。仕方なく、可部町三入の次姉の家に子供をよんで三人で住みました。姉の家では、納屋の八畳を借りて入りました。

### 平和な暮しを

この頃から私は、広島駅前の闇市に出て、いろんな商売をしました。娘二人と三人で生活しましたが、姉の家が農家であつたので、食べることにについては、割に楽でした。そのうち私は、可部線の古市橋の駅前で、靴の商売を始めました。昭和五十一年の半ばまで、この商売を続けました。その間、昭和三十五年に長女が、昭和三十六年に次女がそれぞれ嫁ぎました。

私も寄る年波で、一人になったので、広島原爆養護ホームを知り入所する気になりました。ホームに行つて、入所したい話をしたら、市役所に行く様に言われたので市役所にお願ひし、昭和五十一年九月十六日に入所しました。入所以来、職員みんなに親切にしてもらつて、毎日を楽しく過しております。ホームでお世話になつている私達は幸わせですが、入所出来ず色々困つておられる方々のことを思うと、気の毒でなりません。終戦以来、過ぎ去つた歳月を思うとき、今後二度と戦争はしないことです。全世界のどんな国とも仲良くし、武器や原子爆弾など使用しない、平和な暮しが出来ることが一番大切なことだと思ひます。

寺西さんは昭和五十六年三月五日、呼吸不全の為、急死  
されました。つつしんで、哀悼の意を表します。

## 一人息子と被爆して

梶 本 ミチコ (74才)

被爆地…己斐町・己斐郵便局内(爆心地より二・五km)  
当時の急性症状…なし

家族の死亡…兄嫁の弟が被爆死(市内己斐町)

現 症…心室内伝導障害・腎機能障害・高コルマテロー  
ル血症・変形性背椎症・白内障

### 生いたち

私は、父・河原与太郎、母・ツチとの間に長女として広島市己斐町五十番の一番屋敷で生まれました。三人兄弟で、兄一人、弟一人の三人でした。私の生まれた頃、私の家は植木、花の栽培を家業としておりました。己斐小学校を卒業し、近所の和裁の先生について二年間習いました。家で、この和裁を六年位続けました。そして、二十二才の春結婚しました。しかし縁な

く、半年間位で離婚し実家に帰りました。実家では、和裁や花造りをしておりました。

二十八才の時、佐伯郡宮島町の梶本福太郎と結婚しました。夫・福太郎は、結婚して四カ月位して、広陵満州開拓団の指導員となり、単身渡満しましたので、私は実家に帰りました。実家での私は、弟嫁と和裁を、母と花造りをして生活しました。翌年に長男・強が生まれました。その頃、弟は、近畿電気KKに勤務中でしたが、会社の都合でジャワに派遣され、赴任して行きました。あとは、女、子供の六人が残りました。

### 真黒い雨

二十年八月六日は、朝からよく暗れておりました。当日、己斐の実家には、母と弟嫁と私、私の子、弟の子、計五人がいました。母と弟嫁は、代用食を作るのに臼で粉をひいておりました。弟の子がこれを邪魔するので、母が私に「子供を連れて郵便局にゆきなさい。今年は梶本の自家の初盆だから、仏のお供えにお金を送んなさい。」と言ったので、私は弟の子を背に早速家

を出て、己斐郵便局に行きました。

私は、この郵便局で、原爆にあったのです。局の窓口で、送金のため現金を差出したと同時に被爆。局の天井が落ちて、中ぶらりんになりました。私はびっくりして、弟の子を背中に負ぶったまま、その場にうつぶせになりました。そのうち局長さんが、「もうおさまったらしいから、帰りなさい。」と言われて外に出ました。道路に出てみると、原爆のため行倒れになった人達が、道路の両側にしよぎ倒しになっていました。この中を私は、子供を背負って走るようにして家に帰り着きました。

帰ってみると、白引きをしていた母は、爆風で炊事場へ投出され、顔半分が打撲のため紫色になっており、身体のうちが傷だらけでした。私達を心配して、途中まで迎えにきてくれた弟嫁は、無傷でした。私の子は一人で寝かせていたのですが、この頃夫婦で、二階に下宿していた男の人が抱きかかえ避難してくれて居たので無事でした。弟の上の子は当時小学校二年生で、学校から避難中で無事でした。家は窓ガラスが全

部こわれて、一階八畳の天井が落ちておりましたが、ふと外を見ると、あたり一面真黒い雨が降っておりました。せっかく、洗たくした衣類に黒いはん点が出来て、困ってしまいました。早速取入れて洗たくをし直しましたが、このよごれはどうしても落ちませんでした。今考えると、何年たつてもそのよごれは落ちなかつたように思います。ようやく家の中を片付けて、その日、寝ることだけは出来ました。

### 食べることで頭がいっぱい

被爆直後、私はどうしてよいかわからずしばらく茫然として居りましたが、氣をとり直して、母と弟嫁と二人で家の廻りから片付けを始めました。特に小さい子供達がいるので、ガラスの破片が散乱しているのが一番気がかりでした。小さい破片まで一つ一つ手で拾いました。こうして一カ月近くかかって片付けた位です。

それから、何といつても食べるのが一番です。それからというもの食べるという事で頭がいっぱい

た。早速、家の周囲の花畑のほとんどを、食べものの畑にしました。じゃがいも、高粱、麦などを植付けました。原爆による外傷のなかつた私は、元氣を出して食べものの買出しに遠くまで行きました。己斐峠を越えて、佐伯郡石内村へ、又、北へ入って安佐郡安村へと親せきや知人をたずねて、食べものを足の続く限り歩き求めました。買出しに行ってもお金は役に立ちません。母、弟嫁、私の着物を出し合つて、それを持つて行つて、お米やいも等食糧と交換してもらいました。一度や二度ではありません。子供達を大きく育ててやりたい一念で、私達は、沢山あつた着物をつぎつぎと食べものにかえて、当時をしのいだものです。こうして、私の乳のみ子や、育ち盛りの弟の子一家六人が命をつないだのです。母は、二十一年八月被爆後一年で亡くなりました。

昭和二十八年四月二十五日、主人は舞鶴に引揚げ帰つて来ました。その元氣な姿をみて家内中安心しました。私達一家は主人が帰つて来たのを機に、翌五月に市内庚午町の引揚住宅にうつり住みました。主人は、

帰ってきて、道路工事の仕事につとめ出したのですが、三カ月位働いて到々病に倒れました。その後、脳に腫瘍が出来て、十年間位病院にかよいました。それで私は、広島市の失対作業員として毎日のように働きました。その頃、日曜、祭日の休みの日は、町内の植木屋の草取り等をして稼ぎました。通院していた主人は段々病状が悪化し、広島市古田町の力田病院に入院しましたが、昭和三十九年一月十五日、五十九才で死亡しました。その頃の私は、主人は病氣、子供は小学校で、三人で暮すのに女手一つで大変でした。この頃、実家の弟嫁が心配してくれ、毎月のように米や薪を買って来て援助してくれ、大助かりでした。やがて長男も就職し、嫁をもらい、長い長い間の辛い日がか明るようになって来た様な気がしました。

### 心の痛みは消えず

私も市の失対作業員を六十五才で定年退職し、家を出て、どこか老人ホームに入ることを決心しました。

広島市役所に相談に行き、佐伯郡佐伯町の町立心和寮

に入りました。入園して一カ月後の或る日、草取り作業中高い処から転落して、全身打撲症になりました。この全身打撲が原因で、広島原爆養護ホームに入所することになりました。その後、この全身打撲による色々な病氣が出て、入所以来原爆病院に通院しておりました。

私は、ホームに住んで居て毎日思います。今日も又、身体がふるえたり、頭痛がくるのではないかと……。然し、人にはわからないので、出来るだけ朗らかにするよう心掛けております。そして食事のことですが、出された食事が毎日毎食、半分位しか食べられないのです。私には、食べることのしあわせが無くなったのかと思うことがあります。原爆投下の当手を振り返りますと、私自身、外傷こそなかったのですが、心の痛みはいまだ消えておりません。当時の郵便局の帰途、この目で見た悲惨な状態を、私は一生忘れることが出来ません。

## 頭が焼けて坊主のように

小田 シズエ (79才)

被爆地：段原日ノ出町・自宅前(屋外) (爆心地より二・五km)

当時の急性症状：八月六日より下痢症状が六カ月続き、発熱、脱毛があった。

現 症：腎硬化・動脈硬化・心臓病

### 生いたち

私は兵庫県姫路市で、父・小田為吉、母・サカとの間に、二男二女のうち、長女として、出生しました。

父は、警察の署長をしておりましたが、あれはたしか私が小学校六年生の時だと思えます。年を取り、物忘れがひどくなり正確には思い出せませんが、父が病死しましたので、揖保郡揖保川町の叔父の所に引取られ、当時の高等小学校を卒業させて貰いました。

その後、父の郷里・高田郡甲立村に帰り、母や姉妹と共に暮して居りましたが、二十二才の時、同村の小田唯則と結婚し、男子二人、女子二人を出産しました。主人は朝日新聞の記者で、当時の飛行機・神風号に乗って、方々に記事を取材に行つて居ましたが、昭和十五年腎臓炎で病死。一時途方にくれましたが、幸にも、私に和裁の技術があり、少しばかりの蓄えと、仕立物を職業として、苦しい生活を続けました。弟や妹達が随分援助して呉れましたので、本当に助りました。

### 被爆時の状況

昭和二十年八月六日、原爆投下された時には、私と四人の子供は、段原日ノ出町二二六の自宅に居りました。私は三女を抱いて、洋間から外に出た途端、激しい閃光と、物凄い爆音を聞き、一瞬茫然として居た様に思います。気が付いた時には、自分の頭が焼けて坊主の様になり、抱いて居た三女は、ガラスの破片が首から胸に向つて突き刺さり、全治する迄半年くらい、毎日日赤病院へ歩いて通院しました。そのほか、三人

の子供は屋内に居り、外傷もなく助かりました。

家屋は、屋根が吹っ飛び、雨が降る日には、傘をさして生活して居りました。終戦直後に、弟の子供が九州から復員して来て瓦礫の整理をし、壊れた所を修理して、屋根もふいてくれましたので、そこで五年位生活する事が出来ました。

### 被爆後の生活

昭和二十五年、弟夫婦のところでも母が死亡し、続いて、妹も婚家先で病死。これまで暮して来た家も痛みが激しく住めなくなり、思い切って売却し、アパートを借り、和裁を続けて生活して居りました。子達達も次第に成長して来て、それぞれ、専門学校に通学する様になりました。アルバイトに家庭教師等をして生活を援助して呉れましたので、何とか、生計を維持する事が出来ました。

昭和三十八年頃には、長男・忠夫が岡山の電々公社に勤務するようになり、次男・憲一は木材業の監督となり、長女も病弱ながら、牛田中学で教職につき、次

女も熊野の方へ嫁し、それぞれ子供が独立しましたので、やっと一息つき、安心しました。

### ホーム入所前後

それから十五年くらい、宇品御幸五丁目の憲一宅の近所のアパートを借り、一人で生活して居りました。

昭和五十三年八月に、心臓病で原爆病院に入院し、五十四年五月二十八日に退院しましたが、帰る家が無く、仕方無しに、皆実町の伊藤内科に転院しました。その後一人暮らしも不安なので、福祉事務所に御願いして、原爆養護ホームに入所させて貰うよう希望しました。

兄弟、子供達も立派に生活して居りますが、色々な事情で、世話になる気になりませんでした。昭和五十四年八月に、原爆養護ホームに入所する事が出来て、それ以後は、一人暮らしの時のような、不安から来る強い心臓発作も起らないようになり、安心して生活をさせて戴いて居ります。

腰痛のため、殆んど毎日原爆病院へ通院しておりませんが、申し分なく満ち足りた気持ちで、感謝の囀々を送

らせて貰っております。もう少し体調が良くなったら、色々のクラブにも参加して、楽しい日暮しをさせて貰いたいと思つて居ります。最後に家族の皆さんも、非常によろこんで感謝致しております。職員の皆様にも大変良くして戴き、有難い事と思ひます。



## 電車の中で被爆

山中 マサノ (70才)

被爆地：己斐町・電車の中(爆心地より三・〇km)

当時の急性症状・特に異常なし

家族の死亡・妹が頭部負傷にて死亡

現 症：動脈硬化・心障害・慢性胃炎

## 生いたち

私は広島県山県郡安野村横原で、父・岩崎芳太郎、母・キクノの間に、六人兄弟の次女として明治四十三年九月一日に生まれました。内一人は小さい時に死亡し、第一人と妹三人は、無事に成長致しました。

両親は農業を営み、生活をして居りましたが、私が十五才の頃に、父が相場に手を出し大失敗して、土地も家も売り払い広島に出て参りました。観音町で借家住いをし、広島放送局の小使さんしながら、生活し

て居りました。

当時私は、白島九軒町の木村彦作と言う海軍将校の家に一年半、その後、京橋町の花田屋と言う商家に住み込み女中として三年位働きました。二十才の時に、一つ年上のタクシー運転手をしていた上田春三郎と結婚し、六年間一緒に生活しましたが、主人が余りにも道楽をするので離婚致しました。昭和十二年二十七才の時、十八才年上の山中武次郎と結婚し、千田町二丁目六三九番地にある甲三三菱の広島出張所で、夫婦共に住込み勤務をしていました。昭和二十年戦争が激しくなるにつれ、此の事務所が閉鎖されたので、五月に親類をたよって、佐伯郡下水内町同原に疎開しました。

### 私と家族の被爆状況

二十年八月五日に広島に出て来て、妹の家に泊り、六日の朝千田町電停から満員の電車に乗りました。己斐停留所の近く迄来た時に、激しい光に飲み込まれたような気分がし、物凄い破裂音がして目も見えず、呼

吸も止ったような気持でした。長女の信子を背負い、電車の中から無我夢中で逃げ出し、裸足で人の後に付いて行きました。ところが、高須の辺で二度も敵機来襲しましたので、茄子畠の中に避難し、後から来たトラックに乗せて貰おうと思いましたが、けれど怪我人やぼろくずのように焼けた人が沢山乗って居られるので、とても同乗させて貰うどころではありませんでした。裸足で足の裏は焼けるように熱く、道路に転がって居た古草履をひろって履きました。背中の子供は泣き疲れて眠り、私も足が棒のようになり、日も暮れかけて途方にくれていました。五日市八幡の民家に頼んで見たら、「一晩泊めて上げましょう」と言われ、地獄で仏に出会ったような気持でした。食物も少し戴き、ここより嬉しく思いました。

翌日は又朝早くから歩き続けて、七日の夕方、やつと水内町にたどり付きました。八月六日主人は私の事を心配して、長男を背負って、広島市に出て、火の中の方々を探して歩いたそうです。

一番下の妹は海運局に務めて居ましたが、六日の朝

宇品で被爆し、頭部に二カ所も穴があいたような怪我をして居りました。十二日水内村の私のところへ尋ねて来ました。しかし、大した手当も出来ず、十六日の朝死亡、本当に可愛そうな事をしました。下から二番目の妹は、流川の放送局に務めて居ましたが、建物が倒壊してその下敷となり、生き埋めとなつたが、やつと這い出し泉邸の裏の川に三時間ばかり漬つて居たそうです。之も私の疎開先に来ましたが、それが原因でありましょうか、永い間病氣勝ちでしたが、四十九年大阪で亡くなりました。

長女の信子は、終戦後頭に大きな腫れものが出来て、沢山の血やら膿が出て田舎の医師にかかりましたが、薬も不自由な時代で手に這入らず、ただ診察して貰うだけの状態で困りました。今でもその疵の跡が残つて居ります。

### 被爆後の生活

終戦後は広島に帰つて、主人と共に色々な仕事に付き、他家の手伝や失業対策事業にまで出て働きました。

主人も次第に体が弱くなり、四十一年に市役所に御願いし、原爆養護ホームに入所させて戴きました。私も原爆後遺症の神経性難聴で耳が遠くなり、五十年頃からは左眼白内障で、仕事が出来なくなりました。千葉県の郵便局に勤務して居ります長男の進のところに行つたりしましたが、進が離婚し、子供も嫁が連れて帰つて居る状態で居りづらかつたものです。信子の婚家先（広島市庚午町）で孫の守りをしていましたが、家も狭く気がねもあり、原爆養護ホームに入所する決心をしました。

### ホーム入所前後

五十三年一月十七日養護ホームに入つて二日目の一月十八日、夫武次郎は長く寝たきりの生活でしたが、舟入病院々長や、ホームの皆様方の手厚い看護もむなしく、永眠致しました。

思えば永く苦しい生活が続きましたが、現在では何の不自由もなく、楽しい日々を過させて戴き、感謝の気持ちでいっぱい此の平和の日々の続く事を願つて居

ります。

熱が有ったので

命拾いした私

佐藤 トモ (80才)

被爆地・東雲町・居宅の屋内(爆心地より三・〇km)

当時の急性症状・負傷なし

家族の死亡・なし

現 症・動脈硬化性心障害・慢性胃炎・腰痛症・上気道  
炎

生いたち

私は南竹屋町で、父・河田豊助、母・ミチとの間に、四姉妹の三女として生まれましたが、他の姉妹は小さい頃に、皆なくなりました。父は以前に京橋町で、かなり大きな菓子商を営んで居たそうですが、人の保証

人になったばかりに迷惑を受け、私がもの心の付いたころには、呉服の行商をして居りました。七才の時、母が病気で亡くなりそれから父が一人で育ててくれました。

竹屋尋常高等小学校の高等科を卒業後、家事手伝をしておりましたが、二十才の時に、広島県世羅郡徳良村の多門春一と結婚をしました。長女久江を出産、産後が悪くて、二年後に子供を置いて、離婚しました。その当時父もあの世に旅立って行き、婚家先に残して来た子供の事を気にかけてながら、病弱の身で一人暮らして居りました。

昭和三年十一月に知人の世話で、東雲町の佐藤角三郎と再婚致しました。角三郎は、通信省に勤務して居り、先妻の残した当時八才の満子を一人で育てて居りました。満子は二十才の時、呉工廠に勤務していた上村猛と結婚し、祥子・紀代子・博之と、三人の子を出産し、幸せに暮して居りました。次第に太平洋戦争が激しくなり、私も隣組の世話等して忙しい毎日を送って居りました。

## 被爆時の状況

昭和二十年八月六日、原爆投下された当時、現在広島大学病院のある近所（旧兵器廠）に住んで居りました。娘が、呉の大空襲に逢い（七月）、産後の身で子供を連れ火の海の中を逃げ廻ったのが原因で、体をこわし、私方で養生して居りました。私は、二人の孫の世話をしながら、隣組の組長をしたり、兵器廠へ勤労奉仕に行ったりで忙しい毎日でした。

八月五日にも建物疎開のお手伝いに行き、無理をしたのがたたり、その夜三十八度も熱が出ました。今思えばそれが大変好運だったと思います。八月六日も引続いて奉仕に行く予定になっていましたが、熱が下がらないので起きることが出来ず、主人も遅れて家を出ました。命拾いを致しました（逋信省を停年退職し、当時修道学園中学に勤務中）。八時十五分、家が大揺れに揺れて、天井の方から瓦のこわれたものやら土くれやら煤が、まっくろになつて落ちて来て、目も開けられない状態でした。生まれて間もない孫を抱きあげ、

頭や背中を瓦礫に打たれながら、博之に怪我をさせまいと必死になつてかばいました。外に出ようとしても家中ガラスの破片が散乱して、赤坊を抱えて一歩も動けず、どうしようかと困つて居る時、主人が額から血を流しながら帰つて来て、子供を抱き取ってくれました。私も自分では気が付きませんでした。方々に怪我をしており全身どろどろになっていました。

そのうち、被爆された方達が、全身弾けたような皮膚をぶらさげて、大勢逃げて来られ、これはただ事ではないと気付きました。娘は丁度便所に這入っていたので、無疵で助かり、五才と三才の孫二人は、外で遊んで居りましたが、近所の方が防空壕に避難させて下さり、無事でした。お昼前頃には主人の姉や従兄、その嫁等、大勢の親類の者や知人が、私方に逃げて来られ面倒を見て上げましたが、その中の何人かの方は亡くなられました。

その夜は敵機の来襲に備えて、島の中に物干竿を四本立て蚊帳を吊り、病人や子供を寝かせました。翌日、大正橋の派出所へむすびを取りに来るようにと、連絡

がありました。が、当番の人が恐れて行って下さらないので、私は組長としての責任上放って置く訳に行きませんので、一人暮しの男の方に頼みました。その方は、「自分は死んでも、悔いはないから」と潔ぎよく、瓦礫の道を辛い思いをし乍ら私と一緒ににおにぎりを取りに行つて下さったので、やっとのことで皆んなに配給する事が出来ました。その時初めて、全市内が焼土となつてゐるのを見て驚きました。

主人は毎日の様に、親類の誰れ彼れ、近所の帰られぬ人々を、尋ねて歩き廻り、殆んど家には居りませんでした。沢山の人を家では治療が出来ませんので、近くの学校に連れて行きました。教室は勿論、廊下や校庭にも瀕死の体を横たへ、阿鼻叫喚の有様で、手当も満足に出来ず、次々と死んで行く人、畑の土を掘つて死骸を焼く人等で、とても現実の出来事とは思えませんでした。

### 被爆後の生活

食物も無く、水も電気もなく焼け出された親類の人、

病気の娘、乳が無く飢えて泣く孫を抱えて、幾度か死んだ方がましだと思ひました。やつと水道の水が蛇口から出はじめ、明るい電灯が付き、大切にしていた着物と引き換えに、白いお米を喰べたとき、やはり生きていて良かったと思ひました。

病弱でありました娘・満子が、三人の孫を残して他界したのは、昭和二十二年、私が四十七才、孫の博之が満一才の時でありました。この博之を中学校卒業するまで私達夫婦が育てました。

### ホーム入所前後

昭和四十年主人が亡くなり、孫の博之は大阪に就職し、私は一人になりました。以前から家主に、家を建替えるから出てくれと、言われていたのですが、主人が生前無理に頼んで、置いて貰つて居ました手前、仕方無く私はアパートを借り、内職と主人の恩給で生活しました。でも貧しくても、生まれて初めての他人に気がねをしなくて済む自由で素晴しい時代でした。

それから十年後、広島市の段原再開発で、立退く事

になり、毎日方々部屋を探し廻りましたが、老年の一人暮しと言うことで何処でも相手にして貰えず、町内会長のお世話で、昭和五十年に原爆養護ホームに入所させて貰いました。入所当時は色々悲しい事もありましたが、五年間を過ぎた現在では、ホームの生活にも慣れて、手芸クラブ・書道クラブ・茶道・舞踊クラブにも参加し、同室者の方々と職員方にも大切にして戴き、何の心配もなくもつたいな日々を送らせて貰い、感謝の気持で一杯です。

それに付けてもあの日、原爆で亡くなられた人々が、可愛そうでなりません。三十五年たった今でも、あの時の惨状を忘れる事が出来ません。つたない私の筆では思うことの万分の一も表現出来ないことが残念ですが、平和の続く事を願って居ります。

## ボロのように

### 焼けただけの人

山根 ツタヨ (77才)

被爆地・宇品七丁目・船舶指令部の屋内(爆心地より三・五km)

当時の急性症状・頭部負傷

家族の死亡・なし

現 症・糖尿病・慢性肝炎

### 生いたち

私は、山県郡大朝町字筏津七七六番地で、父・山根延平、母・チヨノの間に、明治三十六年十月二十日に長女として生まれ、妹が一人居ります。両親は農業で生活して居りましたが、私が十二才の時に、父が亡くなりました。

土地の高等小学校を卒業し、大正十二年、二十才の



暁部隊宇品収容所（撮影者不明）

とき、同郷の樋谷義信と結婚し、俊三を出産しましたが、夫婦共に長男長女のため入籍せず、俊三は父親の方の籍に入れました。結婚後、主人は、三篠でガソリンスタンドを経営して居りましたが、昭和十三年、腸チフスにかかり、舟入病院で亡くなりました。その後私は、当時流川町に有った双葉洋裁学校に一年半位通学し、家で内職しながら、妹夫婦と同居生活して居りました。

#### 被爆時の状況

昭和二十年頃には、宇品暁部隊縫工部に勤務して居りました。八月六日は、朝早く宇品に行き、船舶指令部で、将校さんの服を縫って居る時に原爆が投下されました。私は窓ガラスの破片で頭部を負傷し、暫くの間意識を失いました。あの瞬間の事は、余り良く覚えて居りません。気が付いた時には、顔や頭が血まみれで、出血が止らないので、同僚の方達が、宇品陸軍病院まで連れて行って下さいました。市内の方からトラックで運ばれて来た負傷者や、ボロの様に焼けただけ

た人で満員となり、皆、屋外に放置されていました。陸軍病院にも赤チン位しか薬が無くて、満足な治療は受けられませんでした。

十二時に帰宅命令が出て、我が家へと向いましたが、度々、敵機が襲来するので、避難をしながら、十五分位で帰れるところを、二時間もかかって家に帰りつきました。その途中、体にぼろを着て居られるように肉がぶらさがって居る人、黒こげになり石炭の様になって死んで居る人、防火用水の中に頭を突込んで息絶えた人、とても此の世の中の出来事だとは思えませんでした。自宅は半壊し、とても住める状態では無く、妹達と相談し、八月九日、賀茂郡大和町字篠にある妹婿の親類を頼って疎開し生活しました。その間に頭の疵も自然に癒えて来ました。

### 被爆後の生活

昭和三十三年に又広島に出て、段原日ノ出町の綿工場で三年位働きましたが、被爆の關係か、度々失神する様になり（十分から十五分くらい意識不明となる）、再び

田舎に帰りました。昭和四十年、妹の長女が広島的女学校に入学しましたので、姪と二人で段原山崎町に家を借りました。私は、段原中学校の用務員となり、六年位勤務し、その後、又々田舎に帰りました。

息子・俊三のことですが、終戦当時は滋賀県の少年航空隊に入隊して居ました。無事に復員し、広島硝子に永年勤務して居ましたが、現在では、機械工場に務め、吉島光南町に一家を構え、孫も女学校の二年生になりました。

### ホーム入所前後

昭和四十六年頃からは、大和町で妹夫婦と同居生活して居りましたが、次第に年を取り、体も弱って、肝硬変・慢性心不全で広島日赤病院に通って居りました。甥のすすめで原爆養護ホームに入所する決心をしました。

昭和五十四年七月に原爆養護ホームに入ってから、何不自由なく生活が出来、良く決心して入所したものと喜んで居ります。病院も、同敷地内に舟入病院が

あり、通院も楽で、何も言う事が有りません。息子も孫も、度々面会に来てくれ、楽しい日々を送って居ります。私の命の終る日迄、ホームで御世話になりたいと願って居ります。

## 原爆で娘と私は

### 途方にくれて

植 田 千 年 (74才)

被爆地・草津東町・自宅の屋外(爆心地より四・一km)

当時の急性症状・手に硝子で負傷

家族の死亡・娘の婿(二部隊にて)

現 症・胃炎・動脈硬化・不眠症

### 生いたち

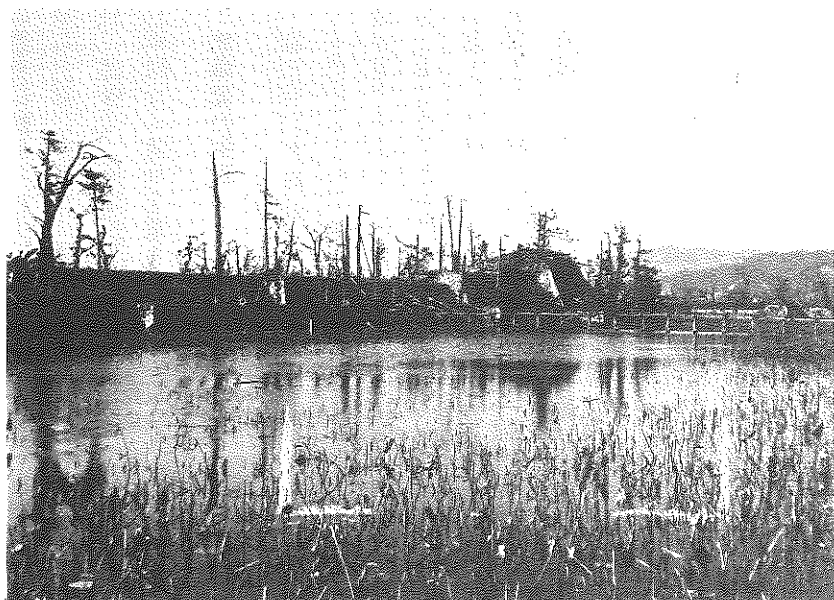
私は、岡山県吉備郡津町で、父・萩野音助、母・スミとの間に、男二人、女五人の内の二女として生まれ

ました。現在は、姉一人と、妹一人、岡山県に居りますが、他の兄弟は、皆他界し三人だけとなりました。

父は役場に務めて居りましたが、色々な事情があり、私は、十二才の時叔母の家に(吉田家)養女となって貰われて行きました。けれど、親類同志が仲違いして、気まづくなつたので、此の家を飛び出し、広島市の堺町で、五年位住み込み店員として働きました。

十九才の時に、渡辺淳と結婚しましたが、一年位で長女敏子を連れて離婚し、苦勞しながら敏子を育てました。敏子が成人し、当時広島市長であった横山金太郎氏の子息・守さんに生まれ、結婚した時には、永年の苦勞が報いられたと思ひ、本当に安心致しました。

昭和十八年、一人身になつた私は、草津町で蒲鉾製造業をしていた植田永一と再婚しました。此の主人が大変むつかしい人で、酒乱の傾向もあり、大そう苦勞を致しました。二度も自殺をしようとした事もありましたが、キリスト教を信仰する事に依り、救われました。当時の私は、友人からも、「しわの中に顔が有る」と言われるくらいやつれて居りました。



被爆後の広島城天守閣と北側の堀（米国陸軍病理学研究所返還写真）

### 被爆時の状況

昭和二十年一月、主人は海軍に応召し、呉に居りました。八月六日原爆投下されました時に、丁度娘が里帰りして来て居りましたので二人が、自宅玄関前で被爆しました。物凄い爆風と共に、家は八割くらい倒壊し、私も硝子の破片で手に怪我をし、娘と共に唯呆然として居りました。そのうち、火傷した人、怪我をした人々が、ぼろぼろになって帰って来られました。幸いに、娘・敏子は無事でしたが、壊れた家は手の付けようも無く、途方にくれていましたところへ、主人が呉から三日間の休暇を貰って帰って来ました。その晩は家に寝る事が出来ず、草津の山にある戒道寺に泊めて貰いました。

翌日、主人と娘と三人で、婿の守の消息を尋ねて、基町の二部隊まで行こうと思いつき満町まで行きました。が、余りにも凄惨な情景に目を覆うばかりでした。人の顔も判別出来ず、馬が半焼となり体から煙りが出しており、道路は死骸の山で、歩く事も出来ません。余り

の悪臭に耐えられず、気分が悪くなり、三人共、途中から引返しました。後知った事ですが、守は、八月六日二部隊で、原爆投下と同時に即死だったそうで、後日軍隊から遺骨を戴きました。

### 被爆後の生活

婿の守が被爆死しましたので、敏子を家に引取り（子供は無かった）、主人も復員して来ました。それ迄物資不足で中止していました蒲鉾の製造を再開し、生活をしました。その後、敏子に再婚の話があり、村田広に嫁し、千津子・大介と二人の孫が出来ました。広が転勤となり横浜市に行きました。

昭和三十年、主人が心臓麻痺で死亡した後、四十才から五十一才まで他の蒲鉾店で女工として働きましたが、被爆後は体も弱くなり、その後九年間位、ぶらぶらして居りました。生活費を得るため、仕事場を改造して間貸しをしたり、主人の年金で生活しました。六十才頃から大分体調が良くなり、六十四才まで、広銀本店の掃除婦となり働きました。

昭和五十四年敏子が横浜の病院で肺癌で死亡してからは、此の世の中の何も彼も嫌になり、生きる張りも無くなりました。岡山県には姉と妹が居り、婿の広や孫も二人おりますが、だれにも頼る気持になれず、体も不自由になり淋しい日々を送って居りました。

### 長く苦しかった日々

昭和四十八年頃、仕事が出来なくなり、将来を考えて非常に悩みました。婿や孫達にもずい分援助してやったのですが、どう言うものか気が合わず、姉妹も高令で頼りにならず、行先の事を思つて心細くなつていた時、原爆養護ホームの話をきき、入所させて貰う決心をして、民生委員の方に御願いしました。家も地主に差上げる様な気持で安く手離しました。

昭和五十四年六月、原爆ホームに入所。最初こそ、団体生活のむつかしさにまごつき、つらい思いもしましたが、最近では、なぜもう少し早く決心して入所しなかつたかとさえ思えて、被爆後の永く、苦しかった日々を振り返っております。現在の心境は、一日でも

元気で永生きをしたいと思い、感謝の気持で一杯です。

## 被爆後の苦しいくらし

森 脇 清 (81才)

被爆地…元宇品町・宇品造船KK工場内(爆心地より四

・一km)

当時の急性症状…下痢(八月六日から一週間)

家族の死亡…なし

現 症…腎障害・変形性脊椎症・動脈硬化性心障害

### 生いたち

山県郡八重村今田で、農業を営む森脇三次を父、ヨシを母として、五人兄妹の四男として私は生まれました。父は、私が五才のとき、四十五才の若さで病死しました。私が、もの心ついた時、兄妹は兄二人、姉二人でした。私が八才の時、九州・福岡県八幡市に一家が移り、上の兄は八幡製鉄に、次兄は古河鋳業に勤めました。上の姉は、一家が九州に移る前に死亡。又次



の姉は、小学校卒業後すぐに広島市に出て、家事見習の仕事につきました。私は嘉穂郡熊白村の上山田小学校に転校したのですが、私が小学校五年生のとき、下の兄が古河鋳業で事故にあつて死亡しました。又、母も同じ年に、五十六才で病死しました。

こうして、不幸続きであつたので、私達一家は、山県郡八重町に帰つて来ました。兄は近くの帽子製造の工場に勤務し、この頃、兄は結婚しました。私は八重小学校に転校し、卒業しましたので、兄の勤務していた工場で、一緒に働きました。ここで二年位働き、私が十五才頃に九州に行き、福岡県田川郡河原町にある中島鉄工所の旋盤見習工として入社し、二十四才までここで働きました。兄は古河鋳業に入社し、電気工として勤めました。

私が二十四才頃に、兄が広島に帰ることになり、広島市竹屋町に住みました。そして、兄は中国電力に入社し、私は宇品造船に勤務しました。私は、昭和四年八月に、佐伯郡地御前の世田シズコ（十九才）と結婚し、南千田町に転宅しました。私達には子供が無かつ

たので、昭和十四年頃、姉の子を養子として入籍しました。そして昭和十六年六月に、市内皆実町に家を新築しここに移り住みました。

#### 被爆時の状況

昭和二十年八月六日当日は、私は宇品造船の第一機械工場内に居て、旋盤の組長として勤めて居ました。八時すぎのこと、ピカッとあたりが光り、すぐドカンと大音響がしましたので、恐ろしくなり、工場裏の防空壕に走り込みました。当日、工場内には一三〇人位の人が働いて居りました。当時の始業時刻は七時でしたから、皆仕事の際中でした。その時、工場の屋根は吹き飛んで、上から灰らしきものが落ちてきました。工場の窓ガラスは全部こわれて飛散しました。

当時、宇品造船は、軍の管理になっていたので、私達は家や家族のことが心配でも退社することが出来ず、ようやく、十時半になって許可が出ました。早速自宅に帰ってみると、家は柱だけ立って全部倒壊しておりましたが、家に居た妻は、無事でした。養子の泰男は、

当時、皆実小学校の一年生で、学校におりましたが、ガラスで後頭部中央辺を二寸位切っており、この子を妻が応急手当をしてもらって連れ帰り、その日は、家の横に建てていた木小屋が無事だったので、ここで親子二人が寝ました。

### 被爆後の生活

被爆後は、早速、食べものの心配でした。私は自転車で双三郡板木村辺まで行き、農家の友人をたずねて、米をわけてもらっては帰って来ました。これを毎月のように、当分の間続けておりました。妻は、島の方に行つても類を持ち帰っておりましたが、その中四十坪の隣地を借ることにして、じゃがいも、南瓜、玉ねぎを作りましたので、この頃から多少楽になりました。又、この頃、配給の煙草を食べものに交換をしたりしたものです。この間三カ月ばかり経過しましたが、家の建築材も努力して集め、秋頃には家らしいものも建てました。

私は宇品造船所に勤めていたのですが、昭和二十八

年五月に退社しました。これは、給料の遅配が出たりして、生活が不安になったからです。宇品造船を辞めてすぐ浜本工芸に就職し、これで生活も安定しました。養子・泰男も大きくなり、昭和三十二年に山陽高校を卒業し、舟入川口町の松本鑄工KKの事務員として就職しました。泰男は二十四才の時、松本社長の娘を妻にもらい、近所の借家に住んで居りましたが、松本鑄工の二階を借りて、珠算塾を開きました。

昭和四十一年、松本社長が亡くなったので退社し、庚午町に転宅して、室内装飾の商売を自営で始めました。この商売も、最初の一年は利益が上り喜んでいたので、二年目から不振となりました。其の後は銀行から借金する、私から金を借りる等繰返しておりました。どうしてもうまくゆかず、四十才の時、借金を残して自殺しました。私は六十八才の頃、胃を痛め半年間ばかり入院し、其の後、体調が悪くなり、肝ぞう、胆のうもわずらい、入退院を繰返しておりました。昭和五十一年六月、妻は、六十五才で死亡しました。

## 原爆養護ホーム入所前後

妻をなくし、子供を失い、財産は総てなくなり、私は失意のどん底にありました。この心労と高血圧が重なり、昭和五十四年七月、庚午四丁目の正田病院に入院しました。入院後割合元気が回復したので、入院中に市役所に相談に行き、五十五年三月退院し、四月に当ホームに入所しました。入所して見ると、みなさんの温い心で、長年にわたる心身の苦しみから解放され、毎日を感謝の心で送っております。

## 被爆の娘を抱いて

友保 キヌエ (79才)

被爆地…仁保町・屋内(爆心地より五・〇km)

当時の急性症状…負傷なし。下痢が八月十日より約一カ月続き、吐気が八月十五日より約二カ月あった。脱毛は十

一月中旬より二カ月間で丸坊主になった。

(家族の死亡…長女が被爆死(市内仁保町))

現 症…脳動脈硬化症・冠硬化症・慢性甲状腺炎・リウ

マチ性関節炎

## 生いたち

私は、比婆郡美古登村大字大屋中迫五十一番地で、父・友保寅造、母・クミとの間に二女として生まれました。父は、私が九才の時、四十八才で心臓マヒで亡くなり、母は、七才の時、三十八才で急性肺炎で死亡しております。

両親を失った時点で母の実家(比婆郡西城町大屋、福本家)に引き取られ、伯父、伯母の世話になり成人しました。五つ年上の姉は、父の実家(祖父・友保極兵衛)へあづけられました。私は、美古登村大屋尋常小学校を卒業しました。姉・シゲヲは祖父の家を早くから出て恋愛結婚し、姉妹の交流は殆んどありませんでした。昭和三十年北九州市若松で亡くなった(六十才)と聞きました。子供は、一人もいなかった様です。

私は、二十才の時お世話する人がありまして、同村の宮本栄三郎（当時二十八才）を婿に迎え、（姉が恋愛結婚で他家に行ったので、私が友保家を相続することになった）一男・一女を出産しました。長男・信正が小学五年生、娘・八千江が小学一年生の時、夫が二、三日の患い（筋炎・二十九才）で亡くなりました。娘は亡夫の実家にあづけ、長男のみを連れて三次に出て働きました。生活の為に紙工場の女工、線路工事の手伝いもしました。

そのうち息子も学校を卒業し、東洋工業の旋盤工として働いてくれる様に成長しましたが、当時の徴兵検査で現役入隊（広島）となり、その後中支へ出征する運命となりました。娘八千江は、尋常高等小学校卒業後は、私と一緒に生活する事になり、白島町にあった広島県立工業試験場に勤務し、私も昭和十八年五月より、大須賀町にありました鉄道教習所へ寮母として通勤していました。

“お母ちゃん、遅かったね”

八月六日、私は家（仁保町青崎二丁目二〇〇の一）にい

ました。警戒警報が解除になり、外に出ようとして窓を開けたとたんパァーッと光りました。刃物のゾクツとするような光でしたが、隣のおじさんに“あれは何ですか”と聞くと、“殺人光線じゃろ”と言われた。

私は、目がくらんで気分が悪くなり、ガラスがこわれて畳の上にはいっばい散らばっていたその上に、しばらくくうずくまっていたうちに、フト気が付き娘の事が心配になり、東洋工業の前まで行きましたら、もうそれこそ何とも言えん格好の人でいっばいです。後ろにザラツザラツと何かをひこずってくる人があるので、何だろうと思いましたが、全身からむけた皮をひこずっておられ、まったく驚きました。それが“お母ちゃん、お母ちゃん”と言うから、娘かと思いましたが、違っていました。八千江もこんな姿になっていたのかと思つて防空頭巾をかぶつて広島駅の前まで行きましたが、火が廻つてとても行かれませぬ。一生懸命捜したのですが娘の姿は見当らず、仕方なくあきらめました。家に戻っているかも知れん”。行き違いになったかと思ひ、急いで家へ引き返したのですが帰っていま

せんでした。

八月七日の朝六時頃、友保さんの家はどこですかと呼ぶ人がありました。娘の勤め先の石堂さんと言う職員さんで、着物を持って迎えに行つて下さい。八千江さんは、太田川（白島町）の土手のほとりに寝かされています”との知らせに、石堂さんと近所の人と四人でタンカを持って走りました。収容されているところへ、八時頃着いたと思います。大勢の負傷者、死体の中からようやく娘を見つけました。朝出勤時はブラウスを着て、モンペをはいていましたが、全身が腫れ皮がむけ、顔も一皮むけ、そのうえ、ふくれ上つて見分けが付きません。声でやつと解る状態で、お母ちゃん、遅かつたね”が最初の言葉でした。

裸同様の上に着物を着せる事もできず、上にかけてタンカで家迄運びました。途中娘が”お母ちゃん水が飲みたい”と言うので、広島駅前にあつた大きな防火水槽の水をタオルにしませ飲ませました。（水槽の中には死体が多く浮いていました）。十三時頃家に着きました。

娘は余り口もきけず、”お母ちゃんは死んでいるかと

思つた”と言いました。娘の体からいやな臭いがし、あちらこちらからウジ虫が這つていたので取つてやりました。”お母ちゃん水が飲みたい”と虫の息で訴えました。水を飲ませると熱が出て死ぬるとか聞いていたので、与えませんでした。娘を九時間抱いていましたが、二十二時亡くなりました（二十二才）。後になつて、何故欲しがつていた水を飲ませなかつたかと、三十五年経過しても娘の声が耳の底に残り、後悔の念に堪えません。が家に帰る途中、防火水槽の水を一回でも与えたのだと、自らを慰めています。

八月八日、青崎小学校の校庭で、多くの被爆犠牲者と一緒に骨にして、娘の骨を抱いて田舎へ帰つたのは八月十五日でした。当時の食事は、外米の配給に、野菜といえは鉄道草等を米の中に入れて雑炊にして食べました。食塩の配給が少ないため、向洋の海辺に良く塩水を汲みに行つたものです。

### 復員した息子の自殺

幸いにして負傷はありませんが、八月十日頃より下

痢が約一カ月続き、吐気が八月十五日より約二カ月もあり、体がだるく食欲もなく、微熱も続きました。脱毛は十一月中頃から始まり、二カ月間で丸坊主になり、頭に手拭を暫らくかぶっていましたが、医療は受けませんでした。被爆後職もなく、売食いの状態の時、中支から息子が復員（昭和二十一年二月二十八日）してきました。大きなマスクをして、毛布等大きな荷物を背負い、帽子を深くかぶっていました。問うと、戦死するつもりであったのに、生きて帰って、顔を見られるのが耻しい”と言いました。私にとっては本当に嬉しかったのです。ところが、息子は妹の死を知り、本人が無事に復員した事を、戦死した多くの戦友達に申し訳がないとか言って、自分を随分責めていたようでした。

当時は先程も申しました様に、食糧事情も悪く、私がか色々と苦勞をするのを見かねてか、昭和二十一年九月二十三日、一通の遺書を残し鉄道自殺をしました。原因は、ノイローゼになっていましたが……。二十六才の若さで私一人残して亡くなってしまいました。可

哀想な事をしました。母親として気がつかなかった点を、返す返すも悔まれてなりません。

私は孤独感、苦しみを神に救って頂きたい気持ちで、昭和二十三年、キリスト教新教の洗礼を受けました。昭和二十四年、牧師さんのすすめにより神戸のキリスト教新学校の寄宿舎に入り、信者の家を廻り、お手伝いをして働きました。昭和四十年頃から体調が次第に悪くなり、アパートの一室を借りて生活保護を受けて暮らしていましたところ、乳ガンと診断され、昭和四十二年十月手術を受けました。経過は良好で、昭和四十八年までは神戸に住んでいました。神戸被爆者の会長さんから、当ホームの話しを聞かされ、再び、四十八年八月に広島に帰ってきました。

### 生きる希望

昭和四十八年九月八日に入所出来ました。設備も大変良く、職員の皆さんもやさしくありがたい事だと思っていました。

入所を決める時は孤老の人達ばかりだと思っていま

した。入所したところ、肉親のいる人が多いのは大変失望しました。私は一人でとても淋しい気持ちで、帰りたくとも帰る家もなく毎日泣いて暮していました。何処にも行く処もなく、ただ神様にお祈りするだけでした。今日に至る迄随分と努力がいました。

今迄に何人もの自殺者がありましたけれど、死ぬる人が羨ましく思われ、思い返して聖書を読みました。

大切な命をむだにしてはいけなさと、思いを変えて今日迄頑張ってきました。ホームに入ってから年二回位「はんこん」が出来高熱で苦しんだ時のことは、言葉にも筆にも表わす事は出来ません。そのうちにテレビに二回程出ましたら、全国の皆さんや外国からも励ましの手紙を貰って、次第に気持ちも変わり生きる希望が出てきました。今では心から有難い事だと感謝の日々を過しています。

